
帝国物語外伝 ～赤髪のマザク～

不知火幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国物語外伝　　く赤髪のマザク

【Nコード】

N2573W

【作者名】

不知火幻

【あらすじ】

『ある雪山に奇妙なエコーズが出現している』。主にハンターの仕事を斡旋しているギルドからの要請を受けた帝国軍第四類所属、ボタンは同じ軍所属の雲鏡と共に噂の国へと旅立つ。同じ頃、親友の恋人を探す旅に出たマザクは、かつて旅仲間であったロットからの手紙により、今いるハンターからの仕事を最後と決めていた。様々な憎しみと愛が交差する『赤い花』の続編ここに完結。

前作、『赤い花』のキャラ紹介

『赤い花』の物語はデータ消失により読むことはできません。これで大体の概要はつかめると思います。（不知火幻）

《前作『赤い花』のキャラクター紹介》

『マテリア』

【基礎データ】性別は女。髪の色は黒。瞳の色は最初は青かったが、13神の1人『レパード』の人格を吸収し、赤い瞳となる。

【性格】酒場のウェイトレスをしていたので明るい性格だが、トラウマからかゴツイ男は苦手。ヴィンセントの事が好きになってからすっかり嫉妬深くなっており独占欲旺盛。ヴィンセントの前では猫かぶっており、甘えている。ハンターの間ではすでに伝説となっている人物。

『13番目の息子』レパードと『3番目の息子』レトリックが造りだした人造人間。レパードの手下であるドールドにより母胎候補として育てられていたが、ドールドの裏切りにより外の世界へ出る。そこで酒場で働いていたものの、酒場の主人に娼婦として売り飛ばされ、処女を喪失する。そのため母胎候補（レトリックの理想では純潔な少女が必要だったらしい）から臓器のみ提供する家畜へと成り下がり、レトリックから『母体の心臓』として狙われることになる。ちなみに当時まだ名前はなかった。

ヴィンセント、ヒヤッキ、ゴードンと出会い、共に旅をしていくうちに、ドールの死体がある『人形の館』にて出生の秘密を知る。ヒヤッキとレパードの戦闘の際、川に落ちてしまい瀕死の状態になる。

レパードの細胞が体に埋め込まれていたため、瀕死の際、レパードの力を吸収する。レパードの能力を強制的に使われ、マテリアを助けようとしたヒヤッキに力を発動させてしまう。ヒヤッキの過去の世界を知ったうえで、無事生還したためレパードに認められた。このときに自分の名前をマテリアだと決める。

ハンターであるキク、アルフ、エンジェルと出会った頃には『真紅の墮天使』マテリアとして賞金稼ぎの間では有名になっていた。『お姉ちゃん』と慕うキクに戸惑いながらも愛しさに目覚め、いつしかヴィンセントを男として意識するようになる。人のいなくなった教会で静かにヴィンセントと結婚式を2人であげた。

氷女のいる洞窟でレトリックと出会う。ファーストにヒヤッキ、レトリックにゴードンを殺害される。マテリアはかるうじてレトリックに勝利する。その時にレパードの人格を吸収した。

『2番目の息子』ファーストにヴィンセントを殺害され自暴自棄になった所を、ヴィンセントの無意識下で出てくるチャンスを得ていた『4番目の息子』ザクロに人格を強制移入されてしまう。その後、キク、エンジェル、アルフの前からマテリアは姿を消した。

数年後、もはや向かう所敵なしとなったマテリアは人の言語を理解し、言葉を話す奇妙な黒猫ミリアと出会った。ミリアと共にヴィンセントの育ての親であるクサナギに会ったマテリア。人に危害を加える『マルスオフ』と同じ赤い瞳を持ち、『忌み嫌われている存在』である子供時代のヴィンセントに対して、我が子同然の愛情を

持っている姿に共感し、マテリアはここに住み、今は亡きヴィンセントの代わりにクサナギのお世話をすることを決意。しかし、マテリアとミリアが買物に出かけている間、クサナギの寿命が尽き、ファーストによって住む場所を燃やされる。

ヴィンセントは生きているというファーストの言葉を信じ、マテリアは新たにロット、マザクを仲間に加え、『ロード』発生の地『瓦礫の塔』へと向かう。そこでマテリアはファーストからこの世界の真実を知ることになる。この世界は『ロード』が理想の『母』と永遠の時を過ごすために造られ、旧世界はそのために滅ぼされたのだ。神脈は『ロード』の母を……新たな生命を造るためのエネルギーとして使われていたのだった。

「この世界はロードの夢だ。もし望にもう一度会えるのなら、こんな夢、壊れても構わない」

冷静かつ穏やかな表情に隠されたファーストの『ロード』に対する憤慨。彼の目的は母胎であった高村望を再び再生することにあった。そのために母胎候補でありカラスとは違い、心臓を持っているマテリアと接触してきたのである。それが例え『ロード』と同じく愛情を求める行為であったとしても叶えたい願いだった。

ファーストから「もし再生に必要な子宮を提供するのなら愛しいヴィンセントを蘇らせてやろう」という条件をもちだされ、世界の命運を選択させられるマテリア。拒めば二度とヴィンセントには会えない。承諾すれば耐性抗体を持つ新種の『紅姫』が人類を滅ぼし、再び世界が滅ぶ。承諾したい欲求をかるうじて仲間の顔を思い浮かべ思いとどまるマテリア。しかし、旧世界を滅ぼした時のように赤

い花びらが再び空に舞い上がり、時は残酷にも刻み続けた。

選択できず、混乱するマテリアの意識をチャンスとばかり副人格であったザクロが乗っ取った。マテリアの体を使ってかつて共に新世界を構築したファーストと戦うザクロ。圧倒的な力でザクロを追い詰めたファーストだったが、『11番目の息子』クラウンの模倣の能力を使って高村望に変身した姿に隙を突かれてしまい、ザクロに敗北してしまう。

「じゃあな兄貴。この世界も、女も、俺のものだ!」

暴虐と残虐の化身と化したザクロはマテリアの意識を支配し、世界を2人だけのものにしようとした。しかし、もしもの時のためにファーストによってミリアの内在に存在するヴィンセントの人格はすでに取り出されていた。ファーストの意識が途絶え、副人格として漂流していたヴィンセントの意識が目覚める。目覚めたヴィンセントはファーストの肉体をもって、マテリアをザクロから救うため最後の戦いへと立ち向かう。激しい戦闘の末、勝利したヴィンセント。崩れていくザクロの意識に対してマテリアは手を差し伸べたが、歪んだ愛情をマテリアに持っていたザクロはそれを拒絶し、白い空間へとその姿を消滅させた。

戦いが終わり、『世界樹』のある島が崩壊しようとしていた。力尽きたヴィンセントを助けようと手を伸ばすマテリア。しかし、ヴィンセントは「会いに行く」という言葉を残したまま海の藻屑へと消えていった。

それから2年。ようやく過去の戦いから立ち直ったマテリア

はもう人の言葉をしゃべらなくなったミアと共に新しい生活を送っていた。

いつものようにヴィンセントのために造った墓へと向かうマテリア。人にあまり懐かないミアが突然墓の前にいる男の元へと走った。

「神様がね　君の元へ帰ってもいいと言ってくれたんだ」

変わらない優しい笑顔で立っているヴィンセント。

初めて2人が出会ったあの真っ白の粉雪が降る町でしたように、マテリアはヴィンセントの元へと走っていた。

『ヴィンセント』

【基礎データ】性別は男。髪は黒。マルスオフのような赤い瞳をしていた。

【性格】気弱でおどした臆病な性格。華奢な体型をしている。基本的に人に優しいが、それは自分を攻撃されなかったための心理的防衛である。仲間と旅をしていても信頼していたのはマテリアのみだった。なのでベツタリとくっついていた。ただ、戦闘となると大型の剣を振り回すほど強く、ヒヤッキに無傷で勝利した。それゆえか仲間から信頼されやすい。マテリアを護ることに命をかけていた。

『4番目の息子』ザクロの副人格。少年の頃、奴隷として売られ

ている所を『紅姫』の研究者だった高村望の目に止まり、ザクロの副人格として利用されることになる。しかし、本来副人格の役割であるザクロの暴走を止めることができず、ファーストと相打ちになった瞬間人格が目覚める。なぜ皆いなくなったのか理解できないまま放浪していたが、『マルスオフ』を忌み嫌う町で捕まり、処刑されそうな所をクサナギに助けられる。成人になるまでクサナギと過ごし、クサナギの病気が悪化するのを防ぐために賞金稼ぎとしてお金を稼ぎ、薬を購入する日々を送っていた。クサナギの容態がいよいよ悪くなった日に、クサナギの反対を押し切って高い賞金額の出る『王の娘』を探す旅に出る。その途中でマテリア、ヒヤツキ、ゴードンと出会い、一緒に旅をすることになる。

人々の憎しみの目を集める（当時はまだマルスオフが跋扈していた）『赤い瞳』をしていたため、差別的な扱いを常に受けていた。ゆえに、人を怖がって町に入ることは躊躇っていた。唯一自分を恐れないマテリアのみ心を許しており、妹のように接していた気持ちだが、いつしか愛情へと変わっていった。マテリアが自分と同じ赤い瞳を持つようになり、一緒に町の外で仲間の帰りを待っていたところ、副人格であるザクロの意識が活性化してくるようになる。その不安を抱えながらマテリアと静かな結婚式をあげる。

氷女の洞窟で、『王の娘』から高村望の幻影を見たヴィンセントはさらにザクロを刺激してしまいもはや暴走寸前までに陥っていた。それを見破ったファーストがヴィンセントを切り殺してしまう。

数年後、不死身ゆえミアという猫に転生し、記憶を失っているもののマテリアに魅かれ、一緒に旅をすることになる。途中、マザク、ロットを仲間にした。性格は前と比べると我侭になり、よくマザクをからかっていた。

瓦礫の塔にて、ファーストに捕らえられ、無理矢理コンタクト・リンク（副人格化）させられるもファーストがザクロに倒されたため再び復活する。しかし、人外の体を持つファーストの体はすでにこの世界に対応しきれず、ザクロを倒した後身体が崩壊が始まる。マテリアに希望を持って生きてほしいという願いを込めて、「会いに行く」という言葉を残したまま海の藻屑へと消える。

異世界に到達し、『名前を持たぬ神』に復活の証である『赤い花』を与えられ、マテリアの待つ世界に再び舞い戻り、マテリアの元へと向かった。成長したマテリアに驚きながらも変わらない彼女と共に過ごす人生を選択したのだった。

『ヒヤッキ』

【基礎データ】性別は女。熊のような体型をしており典型的な戦士タイプ。

【性格】がさつな性格で口が悪い。好戦的で力試しにヴィンセントと戦った。マテリアに対しては当時の情勢からか厳しく接していた。マテリアが強くなるとその力を認め、姉のような態度に変わった。死亡した後、預貯金はマテリアから養護施設に寄付されている。

凄腕の女傭兵。赤ん坊の頃、父親の財産目当てのために、叔父に『底のない谷』に捨てられる。運よく谷に生えた木に引っかかり、ザクロに敗れたロコの副人格・ヴィルドに谷から連れ出される。

傭兵団に拾われ、傭兵の隊長をしていた義父に剣技を教わる。自

分の出生の秘密を知り、叔父に復讐しようと企てたが、すっかり落ちぶれてしまった叔父の姿を見て復讐をやめる。

傭兵団はマスクをした男（ファースト：人間を使って諜報活動をさせていた）が討ち取ってくれと依頼した男に壊滅させられてしまう。その時、深手を負った『5番目の息子』マルスに強制的にコンタクト・リンクさせられ、自分の潜在意識の中（副人格化）に潜り込まれてしまう。

賞金稼ぎとして放浪している頃、軍の捕獲列車に捕らえられてしまう。それはマルスを倒すために連合国が仕組んだ罠だった。マスクの男に子供の頃恋をした女性、高村望（旧世界の母体）に会えるとそのかされたヴィルドと再び出会い、ロコ（ロコはすでにザクロによって死亡しており、『死のゲーム』は自動的に動作していた）の造った『死のゲーム』へと参加させられてしまう。

『死のゲーム』において、ヴィルドに好意を持ちヒヤツキに嫉妬したケイに顔を傷つけられ生涯残る傷となった。ケイを殺し、ケイの気持ちに気づいたヒヤツキは、自分の手に染まったケイの血を見て人格が崩壊。マルスにその人格を乗っ取られる。だが、ヴィルドの捨て身の戦法によりマルスは消滅、ヒヤツキは『想い人』（高村望）の幻影を見ながら目を閉じるヴィルドに初めて自分が恋をしていたことに気づく。ヒヤツキはヴィルドの夢だったパン屋を開業することを目標に再び賞金稼ぎに戻る。

数年後、ヴィンセント、マテリア、ゴードンと出会い、王の娘を探す旅に出る。最初はヴィンセントに甘えてばかりのマテリアを足手まといだと罵っていたが、それは自分が辛い経験をしてきたゆえの愛情の裏返しだった。徐々にマテリアとも打ち解け、姉妹のような関係になる。

アルフ、エンジェル、キクと出会った時、数年前に戦闘を好むハイグラディエーターとして自分に襲いかかったアルフを警戒していたが、アルフの豹変ぶりにすっかり安心していった。

氷女の洞窟にて、ファーストと戦う。マルスの力に覚醒し、ファーストを追い詰めるも圧倒的な力を誇るファーストの前に破れる。マテリアとヴィンセントの幸せを願いながら、ヒヤッキはその生涯を終えた。

死後の世界である彼岸の砂漠にて、再び出会ったヴィルドに自分の夢を語るヒヤッキ。ヴィルドはヒヤッキの手をとり、歩き出す。ヒヤッキはそれが幻であることを知りつつも、砂漠の彼方へと1人歩いていった。

『ゴードン』

【基礎データ】性別は男。髭面で腹の出ている戦士タイプ。

【性格】おおらかで落ち着いた性格。気配りのかかせない性格で、ヒヤッキの暴走の止め役と苦勞を背負い込む。マテリアとヴィンセントの関係に対しては鈍く、ヒヤッキの方が早くから気づいていた。マテリアのことを自分の子供と重ねており何かと気を使っていた。

元小国レイクランドの兵士。兵士だった頃、サラという女性を嫁にむかいいれ、若いながらも隊長となり、ゴードンにとっては絶頂

期だった。身重のサラを1人残し、『8番目の息子』グリード率いる愚者の大軍に立ち向かう。かろうじてグリードに勝利するものの、故郷に帰ったゴードンを待っていたのはレトリックによって滅ぼされた祖国とサラのお腹に突き刺さっていたスノーフリアの国旗だった。

復讐を誓いヴィンセント、マテリア、ヒャッキと共にスノーフリアの『王の娘』を探す旅に出る。その目的は王の目の前で愛する者を殺すことにあった。

途中、アルフ、エンジェル、キクと出会う。アルフとはいやに気が合い、すっかり飲み仲間になっていた。

氷女の洞窟にて、復讐の相手であるレトリックと戦う。圧倒的な力を持つレトリックの前に自爆を計るも失敗する。

死後の世界である静かなる森にて、自分の名を呼ぶ子供の元へと向かい、父親として最後を迎えた。

『アルフ』

【基礎データ】性別は男。元ハイグラディエーター。軍隊の村出身。後にエンジェルと結婚。養子にキクを迎える。

【性格】容姿が良く、戦闘も得意だったためか女性に好かれやすく、すっかりキザな性格になってしまった。若い頃は100人の女を泣かせたと豪語している。今でも女性に対する接し方は変わっていない。ただ、頭が悪く未だに昇進試験を突破できないでいる。

アルフが生まれた村では強さこそがすべてであり、弱い者は容赦なく排除されていた。その村の中でも1千匹のマルスオフを殺した者をハイグラディエーターと呼んでいた。

そのためか村人の気性は凶暴であり、殺戮こそが快感へとなっていた。その村人の気質をアルフは受け継いでいた。

アルフは順調に出世していき、ついに王女の護衛という任務につくことを許された。しかも、強者にありがちなゴツゴツした顔ではなく、貴族のような顔立ちをしていたため病弱なアスカ王女に好意までもたれていた。しかし、それが王の逆鱗に触れ、アルフの立場を危うくしていった。

マルスオフ討伐の際、エンジェルに出会う。元は男だったが、薬物投与によってホルモンのバランスが崩れ、すっかり女となっていたエンジェルにアルフは一目ぼれする。アルフの行動は早く、エンジェルに会いに牢屋へと暇があれば向かっていた。その純朴さ（下心？）をエンジェルに利用され、様々な悪知恵（？）を授けられる。まずエンジェルの計画の邪魔となる、王の護衛として雇われたヒヤ

ツキを倒した。また、異常さを装い王の不信感が高まった所を、『国外追放』という条件でエンジェルを牢屋から出すことに成功した。後にヒヤツキには悪い事をしたと反省している。

村を出る際、自分が村人達の嫉妬（王に抜擢された事による）によつて意図的に村を出された事を知る。アルフが殺戮の衝動にのまれそうになった時、木陰の丘で待っていたのは自分の為にお茶を入れてくれるエンジェルの姿だった。それを見たアルフは殺戮の衝動が昇華され、エンジェルに対して深い愛情を持つようになる。それは生きるものすべてを殺すよう訓練された快感よりも遥かに尊いものであるということアルフは覚えた。そのため性欲のためだけに女と接してきた考え方をすっかり改めるようになる。

その後、キクを仲間にし、賞金稼ぎとして働いている時に、ヴィンセント、マテリア、ゴードン、ヒヤツキに出会う。

レンガの町にて、懺悔を繰り返した伝道師に出会う。伝道師はエンジェルとヴィンセントを殺せばアスカ王女と婚約できるともちかけてきた。アルフはその誘いにのり、伝道師の命令どおり、エンジェルを切り殺す。次にヴィンセントと本気で戦うが敗北する。伝道師に真実を聞かされ、気が触れ自殺したように見せかけた。しかし、それらはすべてエンジェルの計画通りであり、用意しておいた死体を自分の自殺を見せかけただけだった。こうすることによってようやく国のしがらみから解放され、ハイグラディエーターの肩書きを捨て去ることができた。

マテリアが行方不明になった後、キクを養子に迎えて住居を持つ。つまり、キクの義父にあたる。

現在は国軍として働いているが、戦闘のみ特化して育てられたため勉強ができず、昇進試験を落ちまくっている。

『エンジェル』

【基礎データ】性別は女（元は男）。魔術師。

【性格】容姿端麗で元男とは到底思えない美人。泣きボクロがあり、露出度の高い魔術着を身につけていた。性格は穏やかで女性らしい行動をとるが、たまに怒ると男の声になっていた。賢明な理知的な女性。キクのことは出会った当初から娘扱いしていた。

マルスに捕らえられた人間。元は男だったが手術して完全な女となった。『13神の力』を使いこなせる優秀な魔術師。後にアルフと結婚し、キクを養子に迎える。

マルスの牢獄から脱走し、逃げている所アルフ率いる軍隊に捕らえられる。その瞬間、エンジェルは生に絶望した。

マルスの拷問と薬物投与によりホルモンバランスが崩れ、体つきはすでに女へと変貌していた。死を望んでおり、牢屋にやってくるアルフに向かって「殺して」と呟いていた。実際、牢屋から出してやるというアルフの言葉に耳を傾けず、意固地に死を求めていた。アルフが牢屋番に内緒で牢獄の鍵を持ってきたとき、アルフの告白を始めて聞いた。アルフの言葉を信じ、生に対して希望を持つようになる。牢屋の鍵をさしこんだアルフを制して、揉め事を起こさずに脱出できる方法を教え、計画は成功する。その後、アルフだけを信じて生きるようになり2人の絆はますます深まっていった。

ピンチに陥っていたキクを助け、母親のように接する。ヴィンセ

ント、マテリア、ゴードン、ヒヤッキにも出会う。

レンガの町にて、王の追跡者を警戒していたエンジェルはアルフから伝道師が現れたことを聞かされ、わざとアルフに切られる。計画は成功し、もはや王が自分達に興味がないことを知り、安堵した。

マテリアが行方不明になった後、キクを養子に迎え、義母となる。現在はダンスにはまり、運動神経だけはいいアルフを連れて貴族達と踊っている。

『キク』

【基礎データ】性別は女。剣士。『神の血脈』を持っているので当時は両目とも赤い眼をしていた。

【性格】サバサバとしたドライな性格。仲間はビジネス相手としか思っておらず、あまり情を持たなかった。年齢相当に子供っぽい。背は低い。マテリアをお姉ちゃんと呼び懐いており、現在でも手紙のやり取りをしている。

マテリアと同じくレパードとレトリックにより造られた人造人間。聖女となる資格がなかったため奴隷商人に売られることとなった。現在でもキクにその記憶はない。

6歳の時、ダラスという男に買われることになった。髪が金髪ということで東洋の花にちなんで『キク』と名づけられた。

ダラスに剣術など生きる術を教えられ、幼少の頃から賞金稼ぎと

なる。『神の血脈』を持っていたため、常人よりも覚えが早く、小さいながらも剣術の腕は一流だった。

9歳の時、ダラスが殺される。それからは死に対して無頓着となっていく。

11歳の時、依頼主の罠にかかり、絶体絶命の状態となる。死を覚悟した時、アルフとエンジェルに助けられる。短期のつもりで2人の仲間になるが、居心地が良かったためそのままいつくこととなった。

マルスオフの洞窟にて、憧れの賞金稼ぎ『真紅の堕天使』マテリアと出会う。マテリアに何か共通なものを感じたキクは彼女に懐くようになる。実際マテリアはキクの血のつながった姉になる。それゆえかマテリアと同じくヴィンセントに好意を抱いており隙あらば奪うつもりでいた。

レンガの町にて、ヴィンセントとマテリアが結婚したことを知る。2人の結婚を祝福はしたが、多少はショックだったらしい。後に不倫という方法を取ろうとしたが、マテリアに睨まれてしまい失敗に終わる。未だにヴィンセントのことは諦めていない。

氷女の洞窟にて、ヴィンセントとマテリアを守るために、決死の覚悟でレトリックの造りだした魔物達に立ち向かう。ピンチのところに再びアルフとエンジェルに助けられる。マテリア達を追って金網の塔を登りつめたが、そこにマテリアの姿はなかった。

マテリアが行方不明になった後、アルフとエンジェルの養子となる。学校に通っている時にS級犯罪者ゴキブリとカラスに会う。カラスにマテリアと似たものを感じ、彼女のことが気になっていた。後にカラスが自分達と同じレトリックの造りだした母胎である事を

知る。

マテリアから手紙をもらった時、嬉しさのあまり不眠になった。
それからマテリアとは文通仲間となっている。

『マザク』

【基礎データ】性別は女。作家兼冒険者。『レッドイーター：ホーリーランス』の使い手。

【性格】赤いボブカットの髪を特徴とした自己顕示欲の強い性格。酒と煙草好き。未だ独身。

平凡な町に生まれ、平凡な生活をし、平凡に学校を卒業して役所に勤めていた。しかし、上司（妻子もち）のセクハラにより役所を辞め、職業訓練所で偶然見つけた『ハンター』（旧：賞金稼ぎ）の募集を見て応募、訓練を受けハンター見習いとして簡単な仕事を受けていた。

お金持ちの子供のボディガードをしている途中でマテリアに出会う。他の賞金稼ぎからマテリアがあつた『真紅の墮天使』だと聞き、彼女と同行し自分のランクを上げようと企み、共に旅をすることをなんとか承諾してもらう。だが、その旅は決して楽なものではなく、ミリアにはこき使われるわ、仲間となつたロットには馬鹿にされるわと大変だった。

瓦礫の塔にて、ゴキブリに破れたロットを救おうと決死の覚悟で立ち向かう。それは平凡な人生を歩んできたマザクにとって初めての経験だった。ピンチに陥った時、外なる神、白ヤギ『ホーリーランス』の力を取り込み、ゴキブリを倒す。すべての力を使い果たしたマザクは倒れるもののその原因は前日の趣味の創作活動による睡眠不足によるものだった。

帰路にて、しばらくの間マテリアの傍にいたものの、再び冒険者として旅に出て行く。旅の途中で本も出しており、それはベストセラーとなった。マテリアとヴィンセントが無事出会ったことを彼女は知らないでいる。

『ロット』

【基礎データ】性別は男。元男娼。『神の血脈』をもつ。『13神の力：エンプネス』の使い手。

【性格】銀髪の髪をもつ。女嫌い。マテリアには懐いていた。

マルスオフと同じ赤い眼を持つがゆえに親に捨てられ、教祖と名乗る人物に拾われる。資金を得るために男娼を子供の頃からしていた。あまりの苦しさで孤独により『グリード』の力に覚醒。生命の標本から片言を話す女性と過ごす日々を送っていた。

ある日、生命の標本から現世に慕っていた女性を召喚する。それは女性の自由意志を持つことを許す行為であり、ロットとの別れを意味していた。女性が突然いなくなり捨てられたと思った幼きロットは女嫌いとなる。

教祖の命令によってリレイと共にマテリアを倒しに向かうが、帝国軍のデーベルとサイモンによって過去の真実が暴かれる。世界に絶望したロットを救ったのはマテリアの『信じる』という言葉だった。それ以降、マテリアの事だけは信じるようになり、逆にマザクのことは馬鹿にしていた。

瓦礫の塔にて、ファーストのスパイとして教祖に取り入っていたゴキブリとの戦い破れる。その時に、マザクの身を案じていたので、多少なりともマザクを仲間だと認めていたらしい。睡眠不足で倒れたマザクを背負って最後の戦いへと向かう。

帰路にて、ヴィンセントと別れたマテリアの事が心配でしばらく共に生活をしていたが、現世に召還した女性の事を探しに旅に出る。

現在はその女性と共に暮らしている。そして何故かリレイもロツトの傍にいる。「背中を切られた感謝料」としてロツト共に薬師を始めたらしい。多少なりとも好意はあったようだ。

後に手紙とともに3人で写っている写真がマテリアの元へと送られてきた。

『ゴキブリ』

【基礎データ】性別は男。元帝国軍幹部。S級犯罪者。『神の血脈』を持つ者。本名は不詳。年齢も不詳。

【性格】あらゆる術に精通しており、帝国軍第四類を初めて創設したとして有名。理性的な性格だったが、拷問により飢えに狂ってしまった。

『神の血脈』を持つ父と貴族の母を持つ。それゆえに人々から虐待され、暗い幼少期を送った。あまりの辛さに父親に告白すると、

父から「人間など餌だと思え」という言葉が返ってきた。

父の言葉に従い、人々の拷問により死期の近かった父を食い殺し、初めて人の味を覚えたゴキブリは家族を持つことを自ら禁止する。

成人し、母親の縁で大帝政府に就職。その精力的な活動にて幹部にまで昇進する。しかし、同僚の嫉妬から父を食い殺したことを大帝王に知られ、帝国から追放されたうえに牢獄に閉じ込められる。ファーストによりその牢獄から出された時、すでに理性的な面影はなく、変わり果てた姿となっていた。ここからS級犯罪者『ゴキブリ』と名づけられるようになった。

ファーストによりカラスの心臓を守るように言いつけられる。カラスと共に行動している内に彼女に対して情が芽生える。

マテリア達に負けたリレイを助け出すなど、普段は理性的でカラスに対しても理的に接していた。しかし、一旦飢えに狂うと判断力が低下し、凶暴化するため手がつけられなくなる。それゆえに判断を誤り、追い詰めたはずのマザクに破れ、カラスの心臓を守りきれなかった。

最後はカラスを家族だと認め、自らの使役に喰われて人生を終える。本名をカラスに教える事は最後までなかった。

『カラス』

【基礎データ】性別は女。S級犯罪者。マテリアやキクと同じく、

レパードとレトリックによって造られた母胎専用の人造人間（通称：マザー）。『13神の力：グリード』の使い手。年齢は不詳。

【性格】独占欲が強く我侷な性格。滅ぼした国の人間を復活させ女王様ごっこをさせるなど残忍な部分もある。ファーストを便宜上父と呼んでいたがあまり懷いていなかった。どちらかというとゴキブリの方を信頼していた。

レトリックとレパードによって造られた人間。マテリアという名前で呼ばれていた。唯一心臓を持たないため、ゴキブリの心臓を代用していた。

人形の館にて、名もない少女（後のマテリア）と出会う。彼女とは親友だったが、旅の芸人である若者と出て行くとしたために決裂。芸人の若者を殺し、名もない少女を独占しようとしていた。その後、レトリックによって連れて行かれ、体中を弄られ、高村望に似た女性へと造りかえられていった。それゆえに奇怪な行動が目立つようになり、業を煮やしたレトリックは彼女を氷の中へと閉じ込めてしまう。それは彼女なりの不条理な世界に対する抵抗だった。

後に、カラスを閉じ込めた氷はファーストにより奪われ、行方がわからなくなってしまう。慌てたレトリックは多額の報奨金を出し、情報を募り、ようやく探し当てるもののマテリアによって倒されてしまう。

氷から出された彼女の目の前にいたのは『2番目の息子』ファーストだった。彼に愛着を感じ、お父様と呼ぶようになる。その時にゴキブリと出会うことになる。ファーストの事は最初こそ信頼していたが、徐々にその行動が自分を利用するただけに動いていることを悟り疎遠になる。主にファーストに対応していたのはゴキブリ

の方だった。

瓦礫の塔にて、自らの名前を奪ったマテリアと戦う。『氷縛結界』を造り、『13神の力：グリード』を使い、死んだヒヤッキとゴードンを復活させマテリアと戦わせた。戦闘は圧倒的にカラスの方が有利だったが、ゴキブリがマザクに破れてしまい発作を起こしてしまう。

最後の戦いへと向かうマテリアに『友達』だと言われ、初めてカラスは過去の楽しかった思い出を記憶から引き出す事が出来た。それは壮絶な人生を送り続けたカラスにとって唯一の救いの言葉だった。最後はゴキブリに看取られ海の藻屑へと消えていった。

メインキャラクターの紹介

《ハンター》…一般的な賞金稼ぎ。

『マザク』

【性別】女

【年齢】？

【職種】ハンター

【特徴】赤髪のボブカットで背が高い。酒とタバコをこよなく愛する。外なる神『ホーリーランス』の使い手であり、術を発動すれば赤眼化可能。ホーリーランスの正体は白山羊で、マザクの精神に溶け込み、脳内でコミュニケーションを取ることができる。

【性格】豪快かついい加減。姉さん肌をたまに見せる。最初は実績もなく、最低ランクのハンターだったが、『真紅の墮天使』マテリア、『神の血脈』を持つロットと共にS級犯罪者ゴキブリを倒した事で一気に知名度が上がった。

『アレク』

【性別】男

【年齢】28

【職種】ハンター

【特徴】剣士。子供の頃からリデルの護衛をしていた。元貴族の

息子。リデルの父と知り合いだった縁で、リデルの家に住み着く。今はハンターをしている。

【性格】「フツ」と鼻で笑うのが癖。リデルを護衛するためにあらゆる知識を教え込まれている。緻密な戦略をたて、マルスオフを殲滅している。マザクに甘い所がある。

『リデル』

【性別】女

【年齢】27

【職種】ハンター

【特徴】長い髪をアレクに貰った赤いリボンでまとめている。白の魔道着を着、仲間の治癒を担当している。元貴族だけに教養もあり、魔術の腕はプロレベル。

【性格】しっかりとした性格だが、どこか子供っぽい女性。アレク、スタットとは幼なじみで子供の頃から遊んでいた。アレクに好意を抱いているが、アレクにその気がないので決して口には出さないでいる。

『スタット』

【性別】男

【年齢】28

【職種】ハンター

【特徴】頬に剣による傷があり、体格もよく、典型的な戦士。子供の頃からやんちゃでアレクやリデルを連れて冒険していた。帝軍

になるのが夢。

【性格】 体格の割には意外に小心。自分の将来を心配している。マザクの酒飲み相手として常につきあわされ、ベロベロになっている。リデルに好意を抱いているが、当人にその気がないのも知っている。

《帝国軍》：大帝国の精鋭部隊

『雲鏡』

【性別】 男

【年齢】 33

【職種】 帝国軍第四類所属

【特徴】 『十三神』の1人、クラウンの使い手。魔力の導魔性にすぐれた白い全身タイツを着ている。筋肉質でタイツに肉体がビッチリである。暗部を担当しており、普段は別人物に模倣し活動している。

【性格】 男気があり強引だが、以外と紳士的な態度をとる。実は名家のお坊ちやま。一人称は「我」。

『ボタン』

【性別】 女

【年齢】 27

【職種】 帝国軍第四類所属

【特徴】髪型は黒髪のポニーテール。剣帝国時代は『白薔薇騎士団』に所属。眼鏡をかけているが伊達眼鏡である。裁縫が得意。

【性格】落ち着いており、穏やかな性格。頭の回転は速い。戦いを嫌っている。男っぽい話し方をする。

《ロストナンバー》：賢帝国の精鋭部隊

『ブツダ』

【性別】男

【年齢】18

【職種】ロストナンバー『XI』

【特徴】角刈りの黒髪で肌は茶色。額につけホクロあり。一見すると宗教人。

【性格】冷静沈着な性格。常に淡々としており、感情を表に出さない。祈りを習慣としていたのでいつでもどこでも祈る。下着に執着し、自分の持っている基準に当てはまると下着（大概美人）をほしがる。人の物を盗む癖あり。

『フジサキ』

【性別】女

【年齢】19

【職種】ロストナンバー『XI』

【特徴】髪型はセミロング。白い宝石のついた十字架のネックレス

スをしている。背も高い。胸も大きめ。

【性格】大の男嫌いで体に触れられるだけで失神しそうになる。美女が大好きでその妄想は親父的である。何故かブツダに触れられても平気。逆にセクハラしている。

数年前のプロローグ

「ニャーニャー」

「あゝ足に絡みつくな猫！　今お前の飯も作ってやるからさ！」

「ニャー」

黒猫が赤髪の女の足に絡みつく。女はボブカットで肌艶、目元、皮膚共にまだ若い。釣り上がった目をしているものの、気性は荒くなく落ち着いている。

女は木でできた家の台所で朝ご飯を作っていた。一応自分とあと2人分作るつもりだ。1人は親友へ、もう1人は猫の分である。

家は町から少しだけ離れていた。丘の上の開けた場所にある。地味で目立たない造りの家だったが、この家の主人にとっては都合がよかったのだ。

「マザク……手伝おうか？」

白のネグリジエを着た若い女が台所にやってきた。背は小さく、可憐な女性だ。もう年齢的に成人しているが、まだあどけさながどことなく残っていた。

料理の匂いで充滿していた台所が、一瞬でベッドの香りに包まれた。黒猫は女に気づくと、すぐに赤髪の女から離れた。

「マテリア！　まだ眠っていいよ。私がやるから！」

マザクと呼ばれた赤髪の女は、もう自分の私服を着ていた。ネグリジエの女よりも朝早く起きたのだ。なぜなら、マザクは今日遠い旅に出る予定だからである。

「大丈夫。今日は調子がいいから」

白のネグリジエから小さな胸の谷間が見える。櫛でといたのかストレートの黒髪が朝の光に反射する。マテリアは包丁を持つと野菜を切り始めた。手馴れているのかマザクよりも上手だ。

「ニャー」

黒猫がマテリアの前でチョココンと座った。その愛らしい姿にマテ

リアは少し微笑んだ。

「待っててね。ミア、すぐにおいしいものを作るから」

ミアと呼ばれた猫は嬉しそうに今度はマテリアの足元に絡みつく。その姿を愛おしそうに眺めながらも、女の手は器用に野菜を干切りにしていた。

「悪いねえ、今日ぐらいいは朝飯作ってやろうと思ったんだけど」

「いいよ。ありがとうマザク」

照れくさそうに頭を掻くマザクに、マテリアは一旦口元を止めた。

「今日、出て行くんだね」

「……ああ」

「ロットはなんて？」

「『じゃあなヘタレ』だと。相変わらず口の悪いガキだよ」

「ふふ、きつと寂しいんだよ」

ロットと呼ばれた少年は、今外へ水を汲みに行っていた。マザクへ言った最後の言葉がそれだったのだ。ロットが帰ってくる頃には、マザクは旅へともう出て行っている。

マザクは苦笑した。

「気をつけなよ。あいつは一応男だからねえ。これから2人つきりで過ごすんだから」

「大丈夫だよ。ロットはそんな事しないし、ミアだっているし」
マテリアの足元にいるミアが「ニヤー」と頼もしく答えた。

「でも、寂しくなるな。マザクがいなくなると……」

「……………」

まな板を叩く音が部屋に木霊していた。

マザクはマテリアについて考えがよぎる。

『紅姫現象』が起きてから数ヶ月後。

多くの学者が謎とされるその現象に私とマテリアは関わっていた。

十三神の1人、『ファ スト』との戦いである。『紅姫現象』を起こし、世界を崩壊させようとした『ファ スト』を、マテリアの恋人であるヴィンセントが止めたのだ。真実は明かされることはなく、それは私とマテリア、そしてロットの中に留めることとなったが、ヴィンセントは帰ってくる事ができなかった。マテリアは恋人の後を追おうと、幾度も自殺を繰り返した。

マテリアの自殺願望は昼夜問わずひどかった。私とロットが体を押さえつけ、泣き叫ぶマテリアの涙をミアが舐めてやらなければ発作はおさまることなく続いた。ミアを抱きしめたまま泣き続けるマテリアを、私とロットは何度見ただろう？ 自分の力では何もできないという脱力感を何度味わっただろう？ ロットは自分を助けてくれた恩人に、何もしてやれないといつもコブシを握り締めていた。

その発作も時がたつたびにおさまってきた。それは孤独が癒えてきたのだと信じたい。もう……ヴィンセントは帰っては来ないのだから。

「おいしい！」

「そうだろ！ 飲み屋のおやじから秘伝のレシピを聞きだしたんだ」マザクはおいしそうに食事を進めるマテリアを眺めながら、嬉しそうに笑った。ミアが食卓の下でガツガツ自分の餌を食べている。「お前もおいしいだろ？」

「ニャー」

「素直な反応で嬉しいねえ。やっぱり猫はしゃべらないほうが可愛いよ」

「ふふ」

マザクはマテリアの笑顔に救われていた。この笑顔を見たのは何年ぶりだろうか。

「ねえ、マザク」

悲しそうな表情。もう何度も話し合っただけなのに、いまだマテリアはマザクが旅立つことに否定的だ。恐らく、大切な人がいなくなっていくのが怖いのだろう。マザクは歯を見せて笑った。

「何これで最後みたいな顔してんだよ！」

マザクはマテリアの頭をギュツとやった。

「いつ、痛い！」

「ははっ！ 痛いかい？　これが生きてるってことだよ。絶対にまたこの家に帰ってくるって！」

「本当に？」

「約束するよ！　私を誰だと思ってるんだい！　あのS級犯罪者、ゴキブリを倒した有名なマザク様だよ！」

食事が終わり、席から立ち上がる。これ以上いると、必ず自分の心が妥協してしまう。それを振り切って旅に出なければならない。

マザクはマテリアを見ずに旅の準備を始めた。

「今度ここに来る時は作家になってるからね！　あのガキに言っときな！　サイン色紙とサインペン用意しとけてね！」

昨日荷造りした袋を持ち上げる。最後にマテリアに挨拶しようとマザクが振り返ると、マテリアは椅子に座っていなかった。いつの間にか、マザクのすぐ傍に立っている。

「マザク」

マテリアがマザクの胸に抱きつく。マザクは「おっ……」と声を漏らした。

「　今までありがとう。あなたの旅の幸運を祈っています」

「……………」

マテリアが顔を上げた。マザクは泣きそうな顔でマテリアを見下ろしていた。あのマテリアがこんなにも大人だったとは思わなかったからだ。

「……泣きそう？」

「ばつ、違うよ！　べべ別に私はなんともないよ！　まったく！」
マテリアが「あはは！」と無邪気に笑う。ミーマも「ニヤー」と笑った。マザクは涙を拭った。

「2人して私を笑いやがつて、いいかい！　今度ここに来る時は……」

「作家になってる？」

「そう、絶対そうなってるからね」

マザクはビツと親指を上げた。

マテリアはミーマの体を抱きかかえ、椅子に座った。

「　　バイバイ」

マザクを真っ直ぐ見つめたまま、ミーマの片足を挙げると、「バイバイ」の仕草をさせた。ミーマは嫌がることなく、「ニヤー」と鳴いた。

物静かな別れ。泣きながら別れるよりかはマシかとマザクは思った。

「また会おうぜ。あとロットにも……」

「作家になってるからな？」

「そう、それ。言っといてくれよ。　　じゃあな」

マザクはそう言つと、もう振り返ることなく、マテリアの家から出て行った。

「う……ん」

大きく背伸びをする。マザクの眼前に広がっているのは緑の敷地だった。森から鳥の囀りが耳を潤し、暖かな風が気分を高揚させる。マテリアの家から出て数歩歩けば高台の景色が見える。それは絶景だった。

「気持ちのいい天気だねえ。旅にはもってこいだよ」

マザクは大きく息を吸った。本当の所、マテリアやロットを連れて行きたいが、やはりあの状態では連れて行くことはできないだろう。なんだかロットに病弱なマテリアを押し付けたみたいで気が引けるが、自分の夢を叶えたいという欲望が勝った。本当にロットには悪いと思っている。

「悪いね。マテリア……ロット……」

実はマテリアとロットには秘密にしていることがある。それは帝軍からスカウトがきているということだ。帝軍軍として力を生かさないかと交渉人がマザクと接触してきたのだ。帝軍になれば待遇も福利厚生も断然良くなる。何よりも実家にどうとうと自慢できるし、夢だった作家になるための資金も集まる。良い事づくめだ。

「良かったではないか。ためしに私の力を使ってエコーズを倒したのが幸せを呼んだようだ」

心の中で外なる神『ホーリーランス』が話しかけてきた。この脳内会話にもマザクは慣れていた。最初の頃は頭がガンガン唸っていたが、適応できたようだ。

ホーリーランスの正体は白山羊である。S級犯罪者ゴキブリとの戦いで、マザクは外なる神ホーリーランスと出会い力を得ることができた。赤眼化できなかったマザクでも、高度な術を発動できるようになったのである。すでにホーリーランスは恋人以上の付き合いになっている。

「それはそうなんだけどねえ……」

マザクが苦笑いする。本当はロットも一緒に帝軍になれるか交渉するつもりだったが、元帝国に反逆した犯罪者なうえに本人は興味なさそうなのでやめた。何よりもマテリアのことを護ってもらいたかった。となると、自分だけ利益を得ることになってしまう。

「なんか心に引っかかりがきちまっていけないねえ」

「気にすることではない。自らの幸せこそが優先すべきことではないか」

「まあそうなんだろうけど」

チラリとマテリアの家の方を振り返る。家は何も言わずただそこに建っている。

「……あっ！」

『 どうした？ 』

「忘れ物だよ。交渉人と会うための証明書を忘れた。あれがないと信用をなくしちまうからね」

マザクはそそくさと、マテリアの家に戻った。

「……うん？」

入口のドアの前で、声が聞こえる。恐らくマテリアの声だ。何かただ事ではない雰囲気である。マザクは窓から部屋の様子を伺った。マテリアはミィアを腕に抱えたまま項垂れていた。残った食事にも手をつけていない。何か独り言をブツブツ言っている。

（マテリア……まさか発作が！？）

マザクは耳を澄ましてみた。

「……ひどい人」

呟くような声。マテリアはそう言っていた。恨みも、怒気も含まない。ただ悲しい声。

マザクは自分に対して言われているようでドキリとした。

「あなたはとても正直だから……嘘なんて絶対につけない人だから」
ミィアが「ミィ」と声をくぐもらせる。耳に雫が落ちた。マテリアの涙だ。

「……あなたが『帰ってくる』と言うのなら、私はあなたがここに帰ってくるまで生きなくちゃいけないじゃない」

それはマテリアの恋人、ヴィンセントが最後に言った言葉。

十三神の1人、ザクロとの戦いに勝利し、海の藻屑へと消える前

にマテリアに約束した言葉。

マテリアはその言葉をずっと覚えていた。

「あなたが死んでいないのなら。私はあなたを待ち続けなきゃいけないじゃない」

待つという辛さ。ヴィンセントが死亡したとも生存していたともわからない隔壁された世界の中で、待ち続けるというのは拷問のように苦しい。マテリアの嗚咽は、永遠の牢獄に閉じ込められた囚人のように吐き続ける。

「本当に……ひどい人……」

ギュツとミリアを抱きしめる。ミリアの舌がペロペロとマテリアの頬を舐める。とめどなく流れる涙は乾く事を知らない。

「帰ってきてよ……ヴィンセント……お願い……帰ってきて」

神様にすぎる人間は、こんな気持ちなのだろうか。いるのか、いないのか、はつきりわからない者に祈るのは、こんな気持ちなのだろうか。虚構という現実の中で、耐える続ける人間とはこんなにも苦しいのだろうか。

（まったく……馬鹿だよ私は。どうしてマテリアを利用して、のし上がってやろうだなんて考えていたんだろうね）

マザクは過去に言った自分の言葉を思い出していた。それはまだマテリアと出会う前の自分。そして、未だに成長していない愚かな自分。

（最低だ……私は。仲間を利用して……自分だけ幸せになろうだなんて）

マザクは帝国の交渉人と会うための許可証を取りに行かず、そのままマテリアの家を離れた。その顔には後悔も迷いもなかった。ただ、真っ直ぐと自分の旅の目的へと歩いていく。

『 どうするのだ 』

心の中でホーリーランスが問いかける。マザクは躊躇せず答えた。

「作家になる前に、ヴィンセントを見つけだしてやる!」

それからまた　月日は流れていった。

現在のプロローグ

『胎児よ 胎児よ 何故踊る 母親の心がわかって 恐ろしいのか』
(「ドグラ・マグラ」より)

大帝国。

大陸中央にある強大な王国である。1人の皇帝により多数の国が支配され、マルスオフ、エコーズが跋扈するこの時代未だ合併は続いていた。その西門を守る楼門の上に、女が1人立っていた。

腕に小鳥をとまらせ遊ぶ女は自然と微笑み、争いとは無縁のように見える。しかし、重い剣を腰に下げ、頑丈な鎧を着、その姿は戦いに行かざるえない者の姿である。

後ろに誰かが立った。腕にとまっていた鳥が飛び立った。女は静かに、後ろにいる男にここに呼び出した理由を話した。

「エコーズ討伐？」

全身白タイツ姿の男、雲鏡が眉を寄せた。普段は他人にタイツ姿など見せないのだが、今回は見知った女と会うだけなので魔法による『変身』はしていなかった。

エコーズとは最近になって出てきたマルスオフとは違った怪物達だ。マルスオフを操り、国々を襲っている。大帝国も例外ではなく常に厳戒態勢をしかけていた。その生態は未だ謎である。

「そうだ」

穏やかな口調だ。後ろで結んだ長い黒髪がゆれる。女は両手を煉瓦に置き、遠くを眺めた。

「いいもんだなここは。心が洗われる」

微かな朝の光が町を照らす。白い鳩が空へと飛び立った。優しい

風が2人の頬を撫でる。

「気がしれんな。こんな朝早くから。それよりさっきの話を聞かせろ」

「せかすなよ」

女は眼鏡を直すと口を開いた。

「最近ハンターギルドから変な噂を聞かないか？」

「噂？」

「有名なハンターが、行方不明になった」

「有名？ ハンターごときに有名なんてあるのか？」

相変わらずの差別発言。会見にはむかないタイプだなと女は思った。

「実績の高いハンター達だったらしくてね。これ以上貴重な人材を失いたくないんだと。ギルドからの要請」

ハンターギルドとは依頼主から仕事を貰い、その仕事をハンター達に与える言わば仲介業者のような存在だ。仕事内容は様々で、犯罪者の捜索からペット探しまでどんなものも請け負っている。

ギルドでは資格があり、検定試験により1st〜10stと細かいランク付けされている。ランクが上がるたびに依頼料が上がるというシステムだ。今回行方不明になったのは2st〜4stと上位クラスのハンターのようだ。

「ふん。それならばギルドで解決すればよからう。軍が動くことではない」

雲鏡は気性が荒く、問題の多いハンターを嫌っているためまったく乗ってこない。

「残念。ギルドでは解決できないから軍が動くのさ。軍だってギルドから結構な上納金は貰ってるからね。ただ慎重を要する仕事であることは間違いない。ハンター達はギルドの依頼ではなく個人で動いていたみたいだからね」

「……やれやれ」

そんなことだろうと大体の予想はしていたのだろう。雲鏡は首を横に振った。眼鏡の女は雲鏡の反応を確認するとまた視線を下界へと移した。

「ハンター達の痕跡を追っていくと皆北西の方向へと向かっている。大陸のちょうど真ん中に位置する大帝国よりも上の国といえば賢帝国だが……」

「大方拉致されたのではないか。あそこは不正な人体実験の宝庫だからな」

もはやお手上げといった状態だ。

「最初はそうだと思ったが、位置が違う。それに……状況はさらに悪いようだ」

「悪い？」

「ああ。 エコーズが絡んでいる可能性が高い」

「……なるほどな」

雲鏡はようやく最初に言われた言葉の意味がわかったようだ。

「しかし下賤な……なぜそのハンター達の雇い主に直接問わんのだ？」

「ハンターの雇い主は一国の王だ」

「王が？ それは国家の問題なのか？ ならばなぜその国の軍隊が動かない」

「さあね。それも謎だ。もしかすると軍を動かす必要がないと思っているのかもしれない。もしくは動かせないからだ」

意味深な言葉だ。女は何かよからぬ事が起きそうな予感がしている。

「とにかく、奇妙なエコーズらしくてな。その調査をお前に頼みたい。ギルドは直接仕事を受けたわけじゃないから動けんとのことだ。まっ、本音は仕事内容がやばそうだから軍にまわしちゃおうってい

うのが見え見えだけだね」

「だが討伐は対象外だ。他の戦闘向けの死帝に頼めばいいのではないか？」

死帝とは『帝国軍第四類』と呼ばれている精鋭部隊の略称である。強力なエコーズを討伐するために組織された。全員『赤眼化』と呼ばれる高位魔術を扱え、戦闘能力は群を抜いている。雲鏡も女もその部隊に所属しているが、主に暗部活動専門で戦闘は他の者に任せていた。

「だからさ、今回は私がお前と行く事にするよ。パートナーとしては不足ないでしょ？」

女が少し笑う。しゃべり方といい、立ち振る舞いといい、ほとんど男のようだがこういう時だけは女らしい。雲鏡はすぐ目を細めた。「何を冗談を言っている。ボタン。お前が現場に行く必要などない。我だけで十分だ」

雲鏡はクルリと踵を返した。

「おっ、おいおい。まだ詳しい情報を教えてないだろ」

「もうよい。我は寒いのだ！」

「……タイツの上に何か着てきなさいよ」

ボタンは慌てて雲鏡の後ろを追いかけていった。

1 - 1 ロットのその後

《マザクがマテリアの元を去って数ヶ月後》

あの人の後姿を最後に見たのは。

いつだっただろう。

もうすぐ朝だというのに、星が輝いていた。季節によって変わる星はいつも見ていて飽きない。今日も夜風が気持ちいい。

「……………」

小屋から外に出て行くいつもの場所に行く。すると、やはりあの人は自分で造った木のブランコに揺れていた。その膝元には黒い猫が小さな寝息をたてている。

「風邪をひくよ。マテリア」

できるだけ声を抑えて話しかけた。胸に広がる衝動を抑えるためだ。ドクドクと耳元まで心音が聞こえる。この音がマテリアの耳に届かないか心配になる。

「ちよつと外に出たくて」

僕の方に振り向くと、悪戯が見つかった子供のように舌を出す。手は常に猫のミニアの背中をなでている。マテリアの肩にそつと毛布をかけてやる。

「ありがと」

マテリアはまた空を見上げた。そこには幾千という星が輝いてい

た。あの星の中に、マテリアの想い人がいるのだろうか。

「マザクの奴、結局証明書取りに来なかったね」

何を話していいかわからず話題を探す。

「ほんとどうしようもない女だ。絶対慌てて取りに来ると思ったのに僕の予想は外れたよ」

「ふふ」

笑ってくれた。それでももう満足だった。

「マザクはそそっかしいからね。……無事ならいいけど」

「大丈夫だよ。ああ見えてもあの女はしぶとい」

「だね」

それで良かった。今日はもうこれ以上何も話したくなかった。マテリアとはこんな関係でよかった。

「ねえ、ロット」

「うん？」

「あなたの探してた女性 見つかったそうだね」

「……………」

沈静化した心臓が再びドキドキと動き出す。

「なぜ……それを？」

「ギルドの人から聞いたの。どうして私に教えてくれなかったの？ マテリアは後ろを向いたままだ。責めてはいない。」

「そうか。あのおっさん余計な事を……………」

「ごめんね……………ただもうあれから何週間もたってるって言うからゴソゴソとマテリアは懷を探った。そして何かを取り出した。」

「これ、船のチケット。場所はわかるでしょ？」

「…………マテリア」

「会いたがっているのがわかるよ。ロット。動きが挙動不審だもの。会いに行つてあげて」

「マテリア…………違う」

「いいよ。私の事は大丈夫。もう大丈夫だから」
「マテリア！」

我慢ができずマテリアを後ろから抱きしめる。肩から毛布が落ちた。突然の事にマテリアは驚いて息を止めた。

遠かったマテリアの匂いが濃くなった。手から体温が伝わってくる。マテリアの胸から振動が伝わってくる。

「僕は諦められる！ あの人の事を！」
それは本気だった。

「マテリアといっしょなら、諦められる！」

嘘じゃない。

マテリアと一緒にならあの人の事を忘れられる。

「……ロット」

「だから……マテリア」

僕と。

「駄目だよ ロット」

ミーアが目覚めます。「ニャー」と一声鳴いた。

「行ってあげなきゃ」

マテリアの手が、抱きしめていた腕に触れる。

「だって」

振り向いたマテリアは、優しく笑っていた。その顔がすぐ近くにある。全身の血液が顔に集まり、真っ赤になる。

「だって ロットの事を待ってるよ」

その一言が燃え上がった欲望を冷ましていく。
待っている。

あの人が。

僕の母さんが。

僕を。

「待たせちゃ駄目。ロット、行って」

力強い断定の言葉。マテリアの意思は変わらない。

「いつ！ 痛っ！」

ミリアが腕を引っかいた。タイミングの良さはワザとしか思えない。

「ふふっ、ミリアもそう言ってるよ。ねっ？」

「ミャー」

笑っているように見える。こんなに愛想のいい猫だったか。いや、お節介な猫だったな。

「ほらっ、行きなさい。グズグズしてたら、もう会えなくなるよ」

心が軽くなっていく。いつマテリアに言おうか考えていた。けど、マテリアを置いていけなかった。

「マテリア、僕は」

「ありがとうロット。その気持ちは嬉しいよ。だけど、私はあの人を待ってるから。また遊びに来てよ。その人連れてさ」

「……わかった。必ずまたここに帰って来るよ！」

「うん」

チケットを受け取るとすぐに家に入り、準備を始めた。マテリア、マザク、ミリアの写った写真も荷物の中に入れた。走れば朝出航の船に間に合うだろう。

「マテリア！」

「うん」

「……行ってくる」

深々と頭を下げる。マテリアは「いつてらっしゃい」と言ってく

れた。

「ニャー」

「馬鹿猫！ マテリアをちゃんと護ってるよ！ 良い飯食わせてや
ったんだからな！」

「ミィ」

ミィアは了解と返事したようだ。

「頼んだぞ！」

大きく手を振るとその場を離れた。

マテリアは僕が見えなくなるまで手を振ってくれていた。
山の間から微かだが、朝日が見え始める。

必ず帰ってくる。

そう。

その時は神様に誓って嘘じゃなかった。

あれから数年過ぎた。

マテリアの元へは結局帰らなかった。

それにはきちんとした理由がある。

「……今日も綺麗に咲いたよ」

大型犬であるシベリアンハスキーのギンが、従順にお座りをして主人を待っている。僕は十字の墓の前で紫色のラベンダーの花を差し出した。

「あなたが育てた花は、あなたに似て綺麗な花を咲かせてくれる」
僕はお墓の木に額を当てた。暖かな風が吹く。後ろではお墓の前に差し出したラベンダーの花畑があった。それが一斉に片側へと揺れる。遠くで山々が唸っている。空はどこまでいっても真っ青だった。

ヒラヒラと一匹の蝶が、墓の前に供えつけた花に止まった。

「また来るよ」

お墓を離れるとギンを呼んだ。ギンはしっぽを振って僕の元へとやってきた。

マテリアと別れた後。

探していた母の元に向かい、何のトラブルもなく会う事が出来た。あの人はラベンダー畑で水をやっていた。あの白い雪が降る夜、僕を撫でてくれた姿そのままだった。

一瞬、何て声をかけようか迷った。別れてからも何年もたっている。あの帝軍達の話だと僕が無意識に造りだした魔力の人形だと言っていた。だけどラベンダーに嬉しそうに話しかけるあの人は、倒れたまま動かない人形とは違う。マテリアに告白する前以上に心臓が高鳴り、手には汗が流れた。

あの人がこちらを向いた。僕は恐れた。またあの時のように拒絶

されるのではないかと。あの人は僕が嫌いになったから捨てたのだとずっと思っていた。だから会ったら一言『別れ』を言ってやるぐらいの覚悟だったのに、その信念も消沈している。

口を開けた。あの人は目を丸くしてこちらを見ている。名前を……名前を呼ばないと……。でも……。どんな名前だったか忘れてしまった。

「バウツ！」

いきなり後ろから何かが飛びかかってきた。すっかり油断していたのでそのまま押し倒される。それは犬だった。特徴のある模様なのですぐに犬種がわかった。

「ハツハツ！」

犬は僕の顔をペロペロ舐めた。やめると何度呼びかけても犬は止めなかった。くすぐったくて笑っていると、いつの間にかあの人は僕の前に立っていた。

細い眉に瘦せた頬がくつきりと見える。唇は赤く、目は大人の女性と同じように細い。髪はボサボサで、手は乾燥したのかボロボロの皮膚をしていた。それでも、別れる前とまったく変わらない。いつまでも若く、美しい。

『ロツト』

静かな声。大人びていて透き通っていて……。暖かい声。懐かしさに犬に舐められていることも忘れ、不覚にも目頭が熱くなる。

『元気ダツタ？』

あまりにも平凡で普通の掛け声。何年も会っていないというのにまるで時間が止まったようだ。捨てた恨みよりも自分を覚えていてくれた喜びが勝り、目にジワリとしたものが溢れ出してくる。それを犬は見逃さず舐めてくる。

『ホラッ、見テ』

あの人は両手を広げた。一斉にラベンダーが揺れた。濃厚な匂いに、太陽に反射した輝きがあの人のお美しさを際立たせる。無邪気な少女のようにクルリと1回転するとあの人は笑った。

『アナタが見タイツテ言ツタカラ。何年モカケテ育テタ』

その言葉が救いだっただ。

確かに、僕はあの人に花が見たいと言った。
はつきりと思い出した。

あの人は頷いて笑っていた。

『ロツト。綺麗デシヨ？ アナタが好キナオ花』
我慢ができなかった。

子供のように大泣きして、胸に飛び込んだ。
胸の中で泣くと僕にいつもしているように、頭を撫でてくれた。
男娼だった時、客が取れず、親方に殴られ泣いて帰った時も撫でてくれた。

何も、母さんは何も変わっていなかった。

『ヨシヨシ』

「さっ、帰ろうか？」

「バウッ」

僕の母さんはもういない。

十三神の魔力から造りだした人間の寿命は元々短いらしい。僕があの人とようやく会えたあの日まで、生きていた事が奇跡だと専門家は言った。……マテリアの言う事を聞いておいて良かったと思っている。

別れは突然だった。

一緒にラベンダー畑の手入れをしていた時だ。急に倒れ、そのま

ま寝たきりとなった。これからずっと一緒に過ごせると思っていただけにショックだった。

近くに昔仲間だったリレイがいたので、頼み込んで来て診てもらった。もう長くはないと知った時、動揺して大声で泣き喚いてしまった。リレイの平手が頬に来るまで、冷静さは保てなかった。リレイは「あなたがしつかりしないとあの人だって安心できないでしょう！」と怒鳴り返してきた。

ようやく会えたのにすぐにお別れだと聞き、呆然と僕は母が寝ている部屋へと向かった。

部屋に入ろうとした時、あの人は鼻歌を歌っていた。

軽快で楽しそうな歌だ。

意図がわからず、僕は扉を開けた。

風で揺れるカーテンの傍で、あの人は言ってくれた。

『ロット。先二行ツテルネ。アナタノ好キナ才花。マタ作ツテ待ツテクルカラ。楽シミニシテテネ』

また僕は号泣してしまった。母さんに頭を撫でられた。

『ヨシヨシ。泣カナイ泣カナイ』

僕のために母さんは動いてくれていた。もう恨みなどなかった。ただ、別れる事が辛すぎて泣き続けた。

最後に　母さんとリレイの3人で写真を撮った。その後、母さんはベッドの中で楽しそうに目を閉じ、そのまま開くことはなかった。無邪気な子供が遊び疲れて眠るようだった。

ラベンダー畑は今でも花を咲かせている。あの人の想いを潰やすことなどできなかった。ここで自分の命が尽きるまで、花を見守っ

ていきたかった。だから……マテリアの元へは帰らなかった。マテリアへの手紙にそう記した。

今住んでいる家は新しく建てたものだ。母が住んでいた家は元は家畜を飼っていた古い小屋だった。それを改造してここまで造りあげた。

家の煙突から薬の臭いがプーンとする。ギンが嫌そうな顔をした。その顔に笑うと、家の扉を開けた。

「おかえり」

ゴリゴリと薬草を搗り合わせているリレイの姿があった。また変な薬を作っているようだ。

草のシミがついたエプロンに、長袖、長ズボンとボロボロになった作業着を着ている。口にはマスクをしていたのかくつきりと跡が残っている。この草の臭いにも慣れた。リレイはあまり女らしい格好には興味がないようだ。まあ昔からだが。

リレイは母の治療以来ずっといる。一度も来なくていいと言ったら、「背中への傷の慰謝料です。ここを職場として使わせてください」と言って居ついてしまった。確かに昔リレイの勝手な行動に、背中を剣で切りつけてしまったという罪が僕にはある。それで何も言わないようにしたらどんどん荷物を持ってきて、この家の半分はリレイの物になってしまった。

だけど奇妙な話だ。リレイの水浴び姿を偶然目撃した事があるが、背中の傷はもう治っていた気がする。水浴び姿を見られたリレイは、線の細い体の割には白肌で豊満な胸を隠し、ジッと睨んだまま何も言わなかった。結局聞けなかった。それにしても悲鳴1つ上げず、文句1つ言わないリレイがちよっと不気味だ。

「お墓参りは終わりましたか？」

リレイは誰かを確かめることなく、淡々としている。

「ああ」

本当に愛想のない女だ。ちよっとは気遣ってくれてもいいだろうに。だけど、彼女のおかげで母を看取れた。だから何も言わない。

「今年も綺麗なラベンダーが咲きましたね」

「まあな」

「少し疲れました。肩もんでください」

大人しくリレイの言う事を聞く。実際立場としてはリレイの方が上だ。彼女は薬師で腕が良く、家の収入の半分以上は彼女のおかげで成り立っている。

「ここか？」

「そうです。気持ちいいです」

「こうか？」

「そうそう。強くしないでください。ロットは力が強いので」

昔とは立場が逆転してしまった。組織にいた時はやけにオドオドした女だと思っていたのに。まあ、戦闘となると人が変わったように好戦的にはなっていたけど。少し悪戯心がくすぐられた。

「これでどうだ？」

「いつ！ 痛いです！」

「ははっ、効いたたる？」

「わざとやったのですね！ 痛かったです！ ギンの餌代とか誰が稼いでいるのか考えてください！」

「ごめんごめん」

「……まあ、いいですけど」

リレイはふざけてても謝るとすぐに許してくれる。その所は寛容なようだ。リレイから離れ、椅子に座ると机の上に置かれてある手紙を手を取った。

『 親愛なるロット様へ

待ってな。すぐに行ってやるよ。上等な酒用意しときな！

マザク』

手紙にはそう書かれていた。

「返事きましたね」

リレイが薬草から作ったお茶をもって隣に座った。母がいなくなつてから最近リレイはやけに慣れ慣れしくなってきたが、あまり気にならなくなつた。長く彼女と居すぎたせいもあるかもしれない。

「ようやくだな。まあ生きてて良かったよ」

ギルドに僕からの手紙を提出した時は、長い時間がかかるだろうなと思つていた。それがすぐに返事が返ってきた。どうやらギルドを利用してまだハンターをやつてゐるらしい。ハンターの資格登録をしないのは、有名すぎて何かと大変だからだろうと想像している。手紙にはマテリアの現状を報告してある。マザクの心の負担を軽くするためだ。今頃飛び上がつて喜んでいるに違いない。

「これでマザクも危険な旅を止めて好きな創作活動に集中できるだろう。あいつの夢だったからな」

「マザクって人。女性ですよね？」

「うん？ 間違いなく女だ。乳がでかかったからな」

「ロツト」

リレイが細い目でコチラを睨んでくる。なんだ？

「どういう関係ですか？ 教えてもらえませんか？」

「言つただろう？ 昔一緒に旅をした仲間だ」

「それだけですか？」

「他に何かあるのか？」

「……まあいいです」

リレイの態度がよくわからない。マザクの話をするときすぐ嫌な顔をする。女というのは謎だ。

「それにしても、幸せそうですね」

リレイが机の端の方に置いてあつた写真立てを手に取つた。それ何かの間違いであつてほしい写真だ。目に入ると痛みが増す。

「この人がマテリアさんで、隣にいるのがヴィンセントさんですよ？ いいですね。私もこんな花嫁衣装着てみたいです」

「……その男の」
「はい？」

「その男のどこがいいんだ……」

ドヨンと暗い空気が漂った。そう。その写真はマテリアとヴィンセントとかいう気弱そうな変な男が写っている写真だ。しかも、後ろには『結婚しました』というメッセージまでついている。……嘘であってほしい。

2人は一緒に並んで立っていた。マテリアは純白の花嫁衣裳を着ている。ヴィンセントとかいう男は花婿姿で眼鏡をかけている。2人はお互いの手を取りあい、宙には紙で作った花びらが舞っていた。……まあこの結婚方式を見る限り、男の収入は安定しているといっているだろう。

ヴィンセントの顔は柔和で気弱そうな男だ。確かに背も高いし、顔は僕ほどではないが良い男だと思う。だけど何か覇気がないし、マテリアには似合わない。つまり、女々しいのだ。

「こんな男にマテリアはどうして」

マテリアの好みがこんな男だったとは本当にショックだ。

「良い男ではないですか。私には優しそうに見えます。だから針を持つてきて男の顔に刺しても呪いはかからないと思います」

ぐっ……。余計な所をリレイに見られている。

「刺してない……」

「でも刺そうとしましたよね？」

「……お前なんて嫌いだ」

「残念。私は好きですから相殺されます」

「意味がわからん」

「……鈍感」

「なんだよ」

「特に」

自分から仕掛けておいて、不機嫌そうに写真を机に置く。本当に女はわからん。

マテリアに関しては本当にあの時押し倒しておけばよかったと後悔している。そうすればこんなチンチクリンな男にマテリアを取られることはなかった。まさかマテリアの想い人が本当に帰ってくるとは思わなかった。あの崖から落ちたのだから確実に死んでると思っていたのに……。どうしてあの時男として行動に出なかったのか後悔で頭が痛くなる。

「……それをすればマテリアさんに確実に嫌われていると思いますけど」

「なっ！？ 僕は何も言っていないぞっ！？」

「独り言、聞こえてましたよ。その癖を直すのをお勧めします。昔と変わらないですね」

「マザクとマテリアには言うなよ」

「言いませんよ。くだらない。大体マテリアさんの事好きなら今からでも会いに行けばいいじゃないですか」

「……できない」

「どうして？」

「できるわけないだろ。もうマテリアはこの男のものなんだ。会えるもんか」

男の意地というやつだ。マテリアの元へ帰らない最大の原因がこの男である。マザクに言えば確実にネタにされるから絶対に言わない。

「男の気持ちはわかりませんね。もしかしてマザクって人に頼んでマテリアさんの状況を探ってもらおうとしていませんか？」

「なっ！？ どうしてわかったんだ！？」

「……本気だったのですね。こんなことで呼び出されるマザクって人も不憫ですね。子供みたいに拗ねてマテリアさんの所に行けないなんて」

「……………」

「ギン。あなたは駄目ですよ。主人みたいになつては」

「ワオ〜ン」ギンがリレイの元へと向かった。そして2人して僕を遠目で見つめている。……ギン、いつの間にリレイに飼いなさられたんだ？

「はあ、ちよつと出てくる」

「どこに行くのですか？」

「酒だよ。予約してた酒が今日くるはずだ。取りに行つてくる」

「……………」

リレイが物ほしそうに見つめてくる。この場合は一緒に行きたいというサインだ。最初はわからなくて無視していると部屋に引きこもったまま出てこなかった。最近ようやくリレイの行動がわかり始めた。こんな行動は昔組織で働いていた時はなかったと思う。

「その作業着のまま来るなよ。着替えてから一緒に行こう」

リレイの顔がパツと明るくなった。

「仕方ないですね。お供しましょう」

また急にはしゃぎはじめた。本当に女は……止めよう。

「ギン。行くぞ」

「バウツ！」

ギンも尻尾を振つてはしゃいだ。所詮犬だな。

「……………」

机の花瓶の横に置かれた写真立てに目を移す。そこにはマテリア、マザク、ミーア……昔旅をした仲間の写真が写っていた。確か同じ写真をマザクも持っているはずだ。赤い髪で快活に笑うマザクを見て鼻で笑う。

仲間……か。どちらかという战友だな。

今でも思い出す。ゴキブリに深手を負わされ、ピンチに陥った時、あいつははつきりと言った。

「そこで静かに寝てな。あとはこのマザク様が全部片付けとい

てやるよ』

明らかに膝がガクガク震えてたな。臆病な女だったがアレ以来戦闘も平気になったようだ。人は変わっていく。いつまでも昔のままじゃない。

もし、マザクが自分に会ったらなんて言うだろう？

写真よりも背が伸びた。銀髪も少し長くなったかもしれない。顔つきも昔以上にキツくなった。ただ、目つきは優しくなったとリレイに言われるようになったな。ふふっ、アイツの事だからからかってくるかもしれない。

「フンッ、早く来いよ」

写真立てのマザクに向かって言うと、部屋を出た。

……ピシッ。

ロット達が出て行った後、写真立ての横に置いてある花瓶が自然にヒビが入った。ヒビから水が飛び散り、一滴がマザクの顔に当たった。

それは血のようにトロリとマザクの顔から落ちていった。

1 - 2 S級犯罪者

クレイク刑務所。

大陸海側に建築されたこの刑務所では、各国凶悪犯罪者が投獄されていた。1区間に24の独居房があり、鉄格子にて犯罪者を閉じ込めている。日当たりが悪く、換気もひどい。そのためか、犯罪者の多くが精神を病んでいるが、今日は悪い意味で活気づいていた。

ジュル……ジュル……ジュル……。

地下牢の闇から不気味な汁音が聞こえてくる。牢屋に入っている犯罪者達は隅でガタガタと体を震わせていた。湿気が囚人達をヒヤリと包んだが、恐怖から出る汗を止めることはできなかった。囚人が「ひつ、ひい」と恐怖のピークに達し、小さく叫んだ。

「うるさい。もしまた声を出したら食べちゃうからね」

兵士の格好をした男が、悲鳴を上げた囚人を睨んだ。その兵士は囚人達を逃がさないための見張り役だったはずだ。囚人は「ごっ、ごめんなさい」と隅へと引つ込んだ。

ジュル……ジュル……ジュル……。

「ナメクジ」。もうちょっと静かに食べられないのかよ。まったく」

兵士は頭を掻いた。兵士のいる牢屋では地獄が広がっていた。全身に溶解液をまとった太った男が、牢屋に入っている囚人を溶かしている最中なのだ。ナメクジと呼ばれた男は「アハ、ごめん、イモムシ」と呂律の回らない声で答えた。太った腹には囚人の腕と足が飛び出している。もうかなりの部分溶かされたようだ。

「おっ、お前等はなんなんだよ」

囚人がガタガタ震えながら、口を滑らせた。兵士は後ろをチラリと振り返りニヤリと笑った。

「覚えておくといいよ。僕達はお前達より崇高な存在だ。まあこの名前は少し気に入らないけどね」

「知ってるぞ。その名前。人の名前で呼ばれない者。」

S級犯罪

者だ」

名前の意味を知っている囚人が絶望の声を上げた。

S級犯罪者とは犯罪等級最高にして最悪。全員人の名ではなく罪名で呼ばれている犯罪者のことだ。罪状は国の致命的な破壊、貴族や王族の殺害、町や村の破壊など、常人では考えられない犯罪を犯している。

「S級犯罪者！？ そんなの存在するのかよ！？」

「嘘だろ！ 何でこんな所に……」

囚人達がざわめき始めた。「あゝあ、せつかく生かしてやろうと思ってたのに」とイモムシが額に手を当てた。

「グフツ！？」

「おわっ！？」

「ひっ！ ひいつ！ ぐええ！」

牢屋に阿鼻叫喚の悲鳴が上がる。ようやく悲鳴が止んだ時には、立っている者はいなくなっていた。人の息遣いが聞こえなくなり、呼吸による空気の澱みが消えた。

「これだから皆殺しにすればよかったのだ」

全身を鎖でしばられた両腕のない男、オオムカデが潰れていない右目でイモムシを睨んだ。ジャラジャラと唸る無数の鎖には囚人達の赤い血がベッタリついている。廊下の溝から赤い液体が伝っている。

「短気な王様だな。もっと人の恐怖を楽しむ心を持たなきゃ」

イモムシは両手を広げて平謝りした。囚人達は皆、先の尖った鎖で全身を貫かれ、絶命していた。いや、1人だけ生かされていた。

老齢の囚人は壁を背に座っている。顔は深いシワが刻まれ、細長い両腕と両足が地面に投げ出されていた。呼吸をするのもやっとな

のか必死で胸を上下させている。

「……お前達は、死神の使いか？」

「いいや。違うねえ。どちらかというと僕達は正義の味方だ」

「正義？ これだけのことをしておいて」

「正義と悪は違うつてのかい？ どっちも暴力じゃないか」

「……目的はなんだ？」

その囚人は深いシワを寄せてイモムシを見上げた。イモムシは男に写真を見せた。その写真には赤い髪をした女が写っている。

「こいつは……」

囚人の顔が変わった。目が怒りで大きく開く。

「お前達の組織を潰した張本人だ。こいつの名前は『マザク』でいいんだよね？」

「ああ、間違いない。奴らのおかげで教祖様は処刑されたのだ」

「間違いないつて。やはりこいつが赤髪のマザクだ」

イモムシはオオムカデに写真を見せた。オオムカデの右目が細くなつていく。

「……あれから何年もたっているはずなのに見た目が変わっておらん。これも外なる神の影響か？」

「かもしれないね。たく苦労したぜ。この女、ギルドに登録してたはずなのに抹消申請出しやがつて。おかげで居場所ならともかく顔すらわからないなんてとんだ重労働だ。これならペット探しの方がマシだよ」

イモムシはようやく探していた人物の手がかりをつかめたので、

「はあ……」とため息をついた。

「仇を、お前達は仇をうつてくれるのか？」

「ああ？ 誰が少年大好き教祖様の仇なんてうつものか。帝軍のスパイが入り込んだことにも気づかない阿呆なんて必要ないんだよ」

イライラが蓄積していたのか、イモムシの顔が醜く歪む。

「信者の集客と邪魔者の暗殺がお前達の仕事だったつてのに、こっちに仕事回ってきたじゃないか！ 証拠隠蔽とお前達の繋がりを

消すのにどれだけタダ働きしてやったとおもってるんだ！ あんな
どうでもいい小娘ごときにやられやがって！」

「ということは…… お前達はラピスの！」

囚人の表情が怒りへと変わった。

「貴様ら！ よくも我等を見捨てたなっ！ どうして我等を助けて
くれなかった、ぐふっ！？」

「……うるさいんだよ」

イモムシの足が囚人の顔面へと振り下ろされた。「ゴツッ！」と
頭が岩に当たる。イモムシは冷たい視線を囚人に向けた。

「わかってんのか！ このゴミが！ ゴミが！ ゴミが！」

「ドゴッ！ ドゴッ！」と蹴りが囚人の顔面へと何度も、何度も
振り下ろされた。

「やめろ。もう行くぞ」

オオムカデが止めるまで暴行は続いた。イモムシは「はあはあ……」
と息を切らし、蹴りを止めた。蹴られた囚人は鼻から血を出し、気
絶していた。

「ナメクジ。そいつを溶かしておけ」

「アハ、いただきます」

ナメクジは呂律の回らない返事をし、口を大きく開けた。その口
は自分の体を丸呑みできそうなぐらい広がった。気絶している男は
悲鳴すら上げられず、口の中へとおさまっていく。

「チッ、お前がたまに羨ましく思うよ」

イモムシがナメクジの恍惚とした表情に嫉妬した。

「すぐにここから出るぞ」

「慌てなくてもいいんじゃないの？ こんな刑務所。人材不足なの
か数が少ないし、見張りの兵士はコイツだけだったぜ？」

自分の体をゴツツとイモムシは叩いた。外見は刑務所勤務の兵士
だったが、中身はイモムシのものだった。つまり、イモムシが兵士
の中身をすべて食べ、人の皮と体に乗っ取ったのである。

「マザクは待つてはくれまい。また見失うとやっかいだ」

「はいはい、そうでしたね。そういえばこの女の目的聞くの忘れてたな。なんでコイツ旅なんてしてんだろうね？ それにヴィンセントって奴の繋がりもわからないし？」

「そんなことはどうでもよいことだ。 我らの計画を邪魔する者は消すのみ。ただそれだけのことよ」

オオムカデはジャラジャラと鎖を鳴らしながら牢屋から出て行く。
「はいはい。せっかちな王様だねえ。まあこの女。年の割りには綺麗な体してるから『次の体』としてはアリだな」

イモムシがマザクの写真を手にして、ペロリと舌なめずりをした。

「内臓……全部出さないとね」

1 - 3 死からの誘い

「……うん？」

目が覚めると見た事もない空があった。

薄い鮮血の雲に闇に包まれた空。

その中心に白い球体が浮いている。

「月？」

最初はそう思った。

だが、それにしては近すぎる。

凸凹とした地表がはつきりと見えるということは、相当地上に近い。

それにこんな白い月など見た事がない。

「う……ん」

昨日は何をしていたっけ？

思い出そうとすると激しい頭痛がした。

水でも飲もうと体を起こすと、部屋の奥は地平線まで広がっていた。

「……………」

ボケツと遠くを眺める。

どこまでいっても透明な水が広がっている。

水の深さは1メートルあるだろうか。

地表が目視で見える。

その地表は血よりどす黒い赤でできていた。

血管のような管が水の底に張り巡らされている。

「なんだい……ここは？」

はつきりしない頭で考えてみる。

昨日は……昨日は確か仲間とあと誰かと酒飲み競争をしていたはずだ。
体が揺れた。

いや、違う。

体が揺れたのではない。

乗っている小船が揺れたのだ。

『どうして……私は』

小船の中にいるのかと自分に問う前に、船だと思った物が棺桶だと気づいた。

木でできた棺が水に浮かんでいたのだ。

自分はその中に寝かされていた。

『うん？』

何かが光った。

そこに何者かが立っていた。

それは空間の中に光のドアが出来ており、向こう側に立っていた。『誰だ？』

ドアの向こう側は黄色く光っていた。

その世界にも月はあった。

小さい月が3つ、空で光っている。

マザク

迎えに

来た

それは白装束を全身に被っていた。

どこに顔があるのか、どれが上半身と下半身なのか、まったく区別がわからない。

まるで白いシーツを被った幽霊のようだ。
それは立って、自分を見下ろしていた。
『迎えに……何の事だい？』

マザク マザク マザク マザク

自分の名前が連呼される。
耳鳴りのようにうるさい。

その白装束を眺めるたびに、何か不安な気持ちになっていく。
確か……これは……噂に聞く……なんだったか。
頭痛が思考を邪魔して思い出せない。

マザク マザク マザク マザク

お前が

マザク マザク マザク マザク

もうすぐ

マザク マザク マザク マザク

死ぬからだ

「……マザク！」

「うわっ！」

マザクは起き上がると、ベッドに寝かされていた事に気づいた。ベッドの傍には驚いた顔で自分を見つめる若い女性が立っていた。しばらく2人は目を合わせたまま黙ってしまった。

「……どうしたの？」

女性が目を大きく開いた。マザクは汗まみれでまだ女性を見つめていた。着せられていたシャツが汗で濡れ、形のよい胸がくつきりと見えた。

「ここは……どこだい？」

赤い髪の毛が、汗で頬に張り付いている。ただ事ではない雰囲気。に女性は目を動かし、言葉を慎重に選んでいるようだ。

「ここは宿屋。昨日アレクとスタットと一緒に酒場に行ったでしょ？　そこであなた、そこにいたお客さんと酒飲み競争を始めちゃったのよ」

後ろ髪を赤いリボンでまとめ、温和な眉に大きな瞳。長い戦いによって肉食獣のように鋭い顔つきになったマザクとは対照的な癒し系美人。リデルが白い魔道着を着てジツとマザクの目を覗いている。

「あゝ、そうだったねえ」

髪をクシャクシャと掻く。すっかり忘れていたようだ。マザクはかろつじて記憶があるので照れた。

「もうっ！　今日は仕事のある日なのに変な人と飲んじゃって！
危険な仕事なんだからしつかりしてよね！」

リデルはようやくマザクが普段通りに戻ったので、腰に手を当て
ここぞとばかり愚痴った。マザクは「ごめん、ごめん」と何度も謝
った。

「みんな下で待ってるのよ。早く着替えてきてね。前みたいに酔っ
払って、下着姿で来ないでよね！」

「わかってるよ」

「ほんとかな……ゴホッゴホッ！」

急にリデルが咳をした。最近特に多い。

「大丈夫かい？」

「うん、平気。それより早くしてよね」

リデルはもう一度「早くしてね」と言うつと部屋のドアを閉めた。

「……あたたた」

二日酔いからか頭痛がする。胃も少し炎症を起こしているようだ。
喉が異常に渴く。机の上に置いてある水の入ったグラスをグビッと
飲んだ。

「ふう、あゝなんか嫌な夢見たねえ……。まっ、いいか。さてと、
リデルの奴にまた怒られる前に下に降りなきゃね」

服を着替えようとチラッと机を見ると、手紙と写真が置いてあっ
た。写真には3人の男女と1匹の動物が写っている。

「……懐かしいねえ」

右にはマザク、左にはロット、真ん中にはマテリア、その腕に抱
かれた猫ミリア。パーティを結成した時にとった写真だ。嫌がるロ
ットの襟を掴み、親指を立てているマザクがいる。もうしゃべらな
くなったミリアを抱えて笑っているマテリアがいる。猫のくせに人
の言語が理解でき、ピースをしているミリアがいる。マテリアが好
きなロットは照れて顔を真っ赤にしている。

「本当に……懐かしい」

写真の隣にあった手紙を手を取った。そこには『親愛なるマザク

様へ』と書かれていた。これを受け取った時は大笑いしたものだ。返事の手紙はすでに出した。

「あいつも大人になったものだよ」

手紙の後ろには『ロット』という名前が書かれてあった。

1 - 4 ロットからの手紙

『親愛なるマザク様へ

元気か？ 生きてるだろうな？ 死んでもかもしれないが、一応手紙を書いておく。生きていたら返事をくれ。

まず一言言っておく。お前本当に馬鹿だな。本物の馬鹿だ。ギルド登録抹消してるだなんてどういうつもりだ？ この馬鹿女。ヘタレ女。女巨人。乳がでかい女は本当に馬鹿だったな。おかげでお前の居場所がわからないので、わざわざ（強調）全ギルド支部に電報をうつてもらった。どうせ定職なんて持てず、マルスオフなんかと戦ってるんだろうから絶対にギルドへは寄るだろう？ じゃないと仕事ないもんな。維持費が馬鹿高いからはやく返事をくれ。わざわざ（強調）マテリアの友達に頼んでもらってるんだ。僕に会ったらまずお礼を言え（強調）。

重大な話がある。いい話だ。そうすれば僕がマテリアと離れて暮らしている理由もわかる。待ってるぞ。

ロット』（「マザクへの手紙」より）

《昨日。酒場》

「な〜にが手間賃払えだこの馬鹿ガキ。誰がお前の事を助けてやったと思ってるんだよ！ このマザク様だろ〜があ！」

酒を3瓶開け、マザクはすっかり酔っ払っていた。隣にいるハンター、アレクとスタットはそれに付き合わされてしまい迷惑顔で「うんうん」と頷いている。ギルドから手紙を受けとってからずっと

この調子なのだ。

「それに馬鹿馬鹿言い過ぎ！ 馬鹿って言う奴が馬鹿なんです！
そうたる？ アレク？」

「そうだな」

チームのリーダーであるアレクは強制的に同意させられていた。
ここで同意しなければマザクが暴れることを知っているからだ。付き合ってもう何年もたつが、ほとんどマザクの性格を知っている。

「マザクももう飲みすぎだぜ？ もうやめようぜ？」

頬に刀傷のあるスタットが顔を赤くして言った。顔は強面で体格のいいハンターだ。髪も短く、戦闘向きである。

そんなスタットもマザクと一緒にだと必ず酒を飲む。お酒が基本的に大好きなのである。

「そうだな。明日は重要な仕事がある。スタットもマザクも、もうやめておいたほうがいいんじゃないか？」

アレクはクールに言った。髪もスタットよりかは長く、落ち着いた雰囲気のある男だ。冷静で感情的にならない所はリーダーの素質としては十分だった。顔もスタットよりかはいい男である。

「あつ！ リデル！ リデルはどうしたんだよ？」

「彼女は調子が悪い。もう宿屋に帰っている」

「なんだよつ！ 私の酒が飲めないってのかい！ スタット！ 今すぐ連れて来な！」

スタットの顔がみるみる嫌そうに変わった。

「やだよ！ マザクがいけよ！ 彼女俺が行くといつも警戒するよ
うな目で見るから嫌なんだよ！ ちょっと心が傷つくんだよ！」

「それはいつもの事だろ？ 全女性が警戒するっつーの！ お前の
事が好きな女は排卵期（この日はホルモンの影響で男らしい人が好
きになるらしい）ぐらいだっつーの！」

「チクシヨウ！ おやじ！ 酒くれ！」

カウンターの親父がすぐに酒を持ってきた。その酒をスタットが
一気飲みする。目に涙を貯めて。

「2人とももう止めとけ。仕事に影響するぞ」

アレクが2人に注意した。グラスに入れた酒にも手をつけていない。マザクはそれが気に入らない。

「なんだよ。全然飲んでないじゃんか？ 私と酒を飲むのが嫌いのかい？」

酒臭い息を吐きながら、マザクはアレクの肩を抱いた。酒を飲むといつもこれなのである。アレクはすっかり慣れていた。

「俺は遠慮するよ。こんなことで命を落としたくはないからな。」

「お前はまだいい」

「えっ？ 最後。最後の言葉が聞こえなかった？ すっごい嫌味に聞こえたけど聞こえなかった？」

「フツ、お前が羨ましいよ」

アレクはグビツと手に取った酒を飲みほすと、席を立った。

「先に出る。マザクはともかくスタットは早く帰って来い。お前はそんなに酒が強いからな」

「なんだよ！ リデルか？ リデルの所に行くのか？」

「そうだ。ちよつと見てくる」

「そっからすごい事になるんだろ？ チクショウ！」

「フツ、さあな」

思わせぶりな顔で笑うと、アレクはその場から去っていった。

「なんだよ。アイツ……」

残されたマザクとスタットは同時に酒を注文した。ふと、マザクはリデルのことが気になった。

「リデルの奴……アイツ結婚してないんだろ？ もう27歳くらいじゃないかい？ このままじゃ婚期逃しちゃうよ？」

「アレクがいるだろ？ あいつと俺は同じ年齢だから28歳か。ちよどいいじゃねえか。それを言うならお前はどんなだよ？ お前もう30近くだろ？」

スタットはマザクの年齢をはっきりとは知らない。聞いてもはぐらかされるからだ。

「なんかさ、こうピンと来ないんだよね」

「訳わかんねーよ。それを言うなら俺もどうしようかな」

「おっ？ おっ？ どうしたスタット君？ 何か悩んでるのかい？」

さっそくマザクがスタットに絡んできた。スタットは素直に悩みを呟いた。

「もうハンターなんてやっていけねえよ。軍試験落ちちまつたし、体力勝負の所は年齢制限に引っかかるし。かといってハンターやってても不安定だし。明日の仕事成功したら大量の報酬金が出るからそれ持って実家帰ろうかな……」

「何リアルな話してんだい。もっと変態的で面白い話をしないか」
マザクは興醒めした。

「出来るか！」

「そんな事言うんなら私だって言っちゃうよ？ いいのかい？」

「おゝいえいえ。机は壊すなよ」

「それなら遠慮なく……」

マザクは息を吸い込んだ。そして酒をグビッと飲んだ。

「ヴィンセントはどこにいるんだああー！！」

「ドンッ！」と酒瓶を机に叩きつけた。店の客全員が2人に注目した。

「あゝすつきりした。どこにいるんだよヴィンセント。もう隠れてないで出て来いよ」

「なあ。聞きたかったんだが……ヴィンセントって誰？」

「私の友達の恋人さ。ずっと探してるんだけどねえ。まったく情報がないし、どこにいるのかもわかんないし」

「顔写真とかあるのかよ？」

「ない！ だけど私が覚えている！」

「どんな顔なんだ？」

「チラッと見たただけだよ。すごくいい男！」

「わかるかそんなん？」

「私が見ればわかるんだよ！ もう忘れられないからさ！ 私の心にキューピットの矢がブチ刺さってるんだよ！」

「引っこ抜いてもらえ。そして出血多量で死ね」

スタットが「やれやれ」とグビツと酒を飲んだ。

「ロツトって奴の手紙に書いてなかったのか？ ヴインセントの情報が？ 手紙を貰った時のお前かなりはしゃいでたみたいけど？」

「まったく書いてねえ。むしろ出し惜しみしてやがるよ。『いい事』ってなんだよ？ 本当に。明日の仕事が終わって、会いに行った時にビシツと言ってやらないとね」

「ほほう。なんて？」

「今生きてるのは私のおかげだ！ ってね」

「あゝ最悪だね。それ言ったらもう向こう様はすぐに悪口で反論してくるね。手紙の文体から予想するに」

「ははっ！ そうだろうね！ それでいいんだよ」

マザクは嬉しそうだ。恐らく、これがマザクとロツトのやり取りなのだろう。スタットはそう思った。

「それにしてもお前はすごいよ」

「へっ？ 何がさ？」

「そんな曖昧な目的のために旅をしていることがさ。俺は帝軍試験に受かるため、アレクは国軍に入隊するコネをつくるため、リデルは人を救いたいという思いのため。誰もが具体的な目的を持ってハンターなんてやってんの。お前はその男を捜すために人生を浪費している」

「浪費って……」

「浪費さ。目的が叶わなかったら今までの過程なんて浪費以外なものでもねえよ。でもお前が次の仕事でハンター辞めると聞いた時は驚いたけどな」

「……そうかい」

もう何度も話し合ったことだ。マザクがハンターを辞めることをアレク、リデル、スタットは知っている。つまり、このチームから抜けるのだ。

それで今回はみんなで飲みたかったのだ。だが、真面目なリデルとアレクはまったく乗ってこない。乗ってきたのはスタット1人だけである。

「まあでも、私は浪費してるって気はしないね」

「考え方の違いだろ？」

「そうかもしれないね。確かに途方もない目的さ。この広い世界の中で1人の男を捜すってんだからね」

酔っているためマザクの頬が赤い。それでも意思はしっかりとしている。強い目が真っ直ぐ天井を見つめる。

「それでも探すんだよ。それが私の生きる意味なんだからさ」

後悔はしていない。そんな強い意志をスタットは感じ取った。少し視線をマザクから逸らした。

「そうかい。まあお前がそんなに言うなら止めはしないさ。お前のおかげで俺達は助かったからな。まさかあの有名な『ホーリーランズ』の使い手が仲間になってくれるとは思わなかったしな。おかげで高額賞金のマルスオフやエコーズを倒す事ができた」

「感謝しな！ ふふふん」

「そしてこんなに大酒飲みだとは思わなかったよ。今夜が最後になるかもしれないね。　飲みまくるぜ！」

「最後だなんて寂しいこと言うんじゃないよ。　　だけど飲みまくってやるんじゃないさ！」

「だはははは！」と2人は笑いあった。
ゴトツ

飲みあっている2人の後ろで人影がさした。2人だ。

（ねえねえ。早く。早くブツダ声をかけてよ）

（なぜ俺がせねばなんのだ？ 自分が声をかければよかるう？）

（できないから言ってるんじゃない！ もう緊張してるのよ！ ほらっ、手がもうねちよねちよ！）

（めんどくさい事だな。お礼に下着はもらっぞ）

（やるか！）

「……うんっ？ なんだい？」

マザクが後ろを振り向くと、2人の男女が立っていた。

1人は肩まで黒髪をのばした女。セミロングの髪型に服装は白のブラウス。スーツスカートから黒いタイツが見える。スーツの上から薄い黒いコートを羽織っていた。白い宝石のついた十字架のネックレスがよく目立つ。年は相棒よりも1つ上の19歳。

もう1人は茶色の肌に額にホクロがある男だった。巻き付け型の茶色いトーガを着ている。髪は黒く、少し長めの角刈りをしている。一見すると聖職者のようである。年は女より1つ年下で18歳。

2人とも両手に黒の皮手袋をしている。

「少し尋ねたいことがある」

「なんだよ？」

マザクは酔った目で男を見上げた。

「お前はマザクという名前ではないのか？」

「そうだけど？」

「ホーリーランスの使い手の？」

女が我慢できなかったのか割り込んできた。

「そうだよ」

「やはりな」

女が男の隣で「ほらほら！」と興奮している。

「俺の名前はブツダという。こっちの女はフジコちゃんだ」

「フジサキです！」

「ブツダに……フジコちゃんだね？」

「フジサキです」

「ふむ」とブツダが唸った。どこかマザクを値踏みしている。

「私になんか用かい？」

「うむ、そうだな。とりあえず下着をくれないか？」

「適合したの！？」 自分の基準と適合したのね！」 フジサキがブツダに突っ込んだ。

「わかった。妥協して今はいてる下着でいい」

「どこが妥協してんのよ！ むしろ基準上げてんじゃん！」

「なんだいあんた等？ 下着泥棒？」

「ちっ、違います。私達はあなたのファンなんです！ てゅーか愛してます！」

フジサキが慌てて弁解した。顔が真っ赤になっている。

「へー。私も有名になったもんだ。でも愛してるとは言い過ぎだよ」
マザクにとつては慣れたものだ。S級犯罪者、ゴキブリを倒したことですっかり有名になってしまっている。現に酒場にいた客もヒソヒソとマザクを指差して話し始めた。

（かっこいい）。野獣系だわ。野獣系美人だわ。男性ホルモンがものごつつ濃い外資系OJだわ）

フジサキの興奮が全身を駆け巡る。

「そっその、わわわわ私……」

「ちょっと待った!!」

酒場の奥から男が叫んだ。ノッシノッシとやってきた男は背が高く、筋肉質で……全身白タイツだった。その巨人のような姿と、タイツの股から出ている巨根にフジサキは「ひいいいっ！」とブツダの後ろに隠れた。

「マザクだと？ 貴様、マザクと言っのか？」

男は上から目線で名前を確認する。マザクは「そうだよ」とぶっきらぼうに答えた。

「なんと、これは運命か……」

男は首を振った。

「我が名は帝国軍第四類所属、雲鏡！」

男が大声で自分の名を名乗った。周りのザワメキが一層際立ってきた。観客の1人が「大帝国の軍人か？」と呟くのを、ブッダは聞き逃さなかった。

「へー軍人さんがこんな私に何の用だい？」

マザクは余裕なのかまた酒を口に運ぶ。酒場の客のヒソヒソ話がブッダの耳に入った。

「おい、あのタイツ。以外にマトモだぞ。しかも帝軍だし。俺、隅の方で酒飲んでいるアイツと目が合ったとき『喰われる！』って思ったのに。もう目を合わさないようにものすごく気を使ってたのに」「てか、あの白タイツ。股に何か隠してるぞ？　なんだあのかさは？　棍棒でも隠してやがるのか？」

「外人じゃ！　外人が植民地支配にやって来おった！　女を隠せ！」

客は好き勝手に話を拡張させていた。

「めちゃくちゃな言われようだな」

ブッダが少し雲鏡に同情した。

「お前は我が妻にふさわしい」

「えっ？　なんだって？　聞こえなかったけど？」

「私と結婚してもらおう！」

シーンと誰もが静かになった。マザクは「ヒック！」としゃっくりした。

「ちなみにもし我が願いを断るといふのなら……力づくで我が物とする！」

雲鏡の全身から有無を言わさぬオーラが舞い上がる。有言実行。間違いなく冗談ではない。

「ちよちよちよ、ちよつと待った！」

フジサキが急いで手を挙げた。あまりの男の理不尽な要求に我慢できなかったようだ。それでもしっかりとブツダの後ろには隠れている。

「なんだ貴様は？」

「あなた！ いきなり何言ってるの！ アソコがでかいからっていい気にならないでよね！」

「ごく普通の事を言っている。私の仕事は非常に危険が伴う。ゆえに強い女が必要なのだ。あの『ホーリーランス』の使い手となれば申し分ない」

「認めないわ！ マザク様は私のものよ！ 誰があんたみたいなチコでか男に渡すのですか！」

雲鏡は「なっ！」と開いた口が閉じられなかった。

「なんとという破廉恥か！ 女が女を好きになるだと！？ そんな神をも恐れぬ行為！ 許してはおけぬ！」

ブツダは「チ コでか男には反応しなかったな」とつい突っ込んでしまった。マザクは「認めてんじゃね？」と笑った。

「まあ言い合うのはかまわんが、俺を間に挟むのはやめてくれんか？」

フジサキは雲鏡が怖いのでブツダの後ろで文句を言っている。雲鏡もブツダに構わずまくしたてる。ブツダにとってはいい迷惑だった。2人の睡が一齐に飛んでくるからだ。

「女の分際で生意気な！ 貴様は黙って我とマザク殿を祝福していればよいのだ！」

「全身タイツの分際で私の邪魔をする気？ だいたい何よその格好。おば 』なの？ 』おば 』のコスプレ？」

「失礼な！ これは戦闘服だ！ このタイツと我はもはや一心同体。なくてはならぬものなのだ！」

「なんて残念な格好かしら？ タイツが一心同体だなんて終わってるわ。私なら自殺するわね。あんたみたいな人にマザク様の魅力はわからないのよ！」

「貴様に何がわかる！ 彼女がはいているムチムチした黒タイツがすごく素敵だということを！」

「その着眼点には敬服するわ！ だけどね。私はマザク様の頬を赤く染めてグラスを掲げる所がたまらないのよ！ もう興奮して鼻の血管が切れてるしね！」

「なんとっ！？ 貴様もそこに反応したというのか！？」

「それにスタイルだっていいし、顔だってキリツとしていて素敵！ そりゃ確かに癒し系でもないし、童顔でもないわ。だけど大人の女の魅力に頼りたいっていう気持ちを抑えきれないのよ！ もう首を手でクイツとしてもらいたいのよ！」

「そこまでマザク殿を観察しているとは……しかしお前に渡すわけにはいかぬ！ だってぶっちゃけ私の好みだからだ！」

「私なんて愛しちゃってるのよ！」

「ブツダは「うむ。愛は性別を超えるのだ」と頷いた。

「ははっ！ 私モテモテだねえ」

「マザクはまんざらでもない。赤い髪を魅惑的にかきあげる。

「……てかつ、変態達に好かれてんだぞ？ お前」

「スタットは呆れ顔だった。

「まちな！」

「マザクが2人の喧嘩を止めた。2人は口喧嘩をやめてマザクに注目した。」

「喧嘩はやめて公平平等な方法で決着をつければいいじゃないか」
その言葉にスタットは「またか……」と頭を抱えた。

「酒で決めようじゃないか!!」

1 - 5 酒飲み競争

「あの2人は本当に遅いわ！」

リデルはプンプンと怒りながら、マザク達がいる酒場へと向かっていた。傍にはアレクも一緒にいる。辺りはすっかり夜の町へと変化しており、淡い光のランプが灯されていた。

「ほっておけばいい。スタットが倒れたら、マザクがいつものように連れて帰るさ」

「アレクがそんなことだからあの2人が調子に乗って……ゴホゴホ」
「大丈夫か？」

「……平気……大丈夫」

リデルは深呼吸した。酒場はもう目の前にあった。中から人が喚き立つ。

「……盛り上がっているな？」

「ほんとね？」

アレクとリデルが酒場に入ると、客の熱狂が響いてきた。その客達の中心にいるのはマザクとスタットとブツダとフジサキと雲鏡だった。5人はテーブルを囲んで腕を組んでいた。

特にフジサキと雲鏡はお互い睨み合っており、火花がパチパチと飛び散っていた。

「なっ！ なにやってんのよ！」

リデルはズケズケと人ゴミをかき分ける。

「おっ？ リデルじゃないか？ あんたも参加するかい？」

マザクがリデルに気づいた。

「参加するって……何やってるのよ。明日は大事な仕事なのよ？ スタットも」

「いつ、いや。何かこんなことになっちまって」

スタットは頭を掻いた。

「参加しないのかい？」

「するわけないでしょ！ 早くこんなことやめて……」

「じゃ！ 参加はこの5人だね！」

「おおっ！！」と周りの客が叫んだ。リデルはその勢いに驚いている。

「ルールは簡単！ 酒を飲んで最後まで意識を保っていた奴の勝利！ 負けた奴は飲んだ酒代を全部仲良く払う事！ 以上」

マザクが簡単にルール説明をした。

「私とスタットは同じチームだね。ブツダとフジコちゃんもチームって事でいいかい？」

コクリとフジサキは頷いた。ブツダは微妙な顔をした。

「後はあんだだね……」

「構わん。この私に挑戦するとはいい度胸だ。我が力、見せてくれる！」

雲鏡は1人でいいようだ。筋肉質な体が緊張で膨張し、タイツがメキメキと唸っている。フジサキは即マザクとブツダの間に席を移動した。

「次に勝利した時の望みをそれぞれ言いな。まず私からだね。とりあえず実行できる願いとして、今までの酒と煙草代のツケを全部払ってもらうよ！」

リデルは「どこが実行できるのよ！」と怒った。マザクが今までツケにしてきた代金はすでに怖いくらいになっている。リデルでさえ怖くてその金額を見れない。

「じゃ、俺は」

スタットが自分の願いを言おうとすると、リデルがキッと睨んだ。「……なんでもないツス」

スタットはシュンと縮こまった。

「私が勝ったら当然。マザク様と、ウフフフフフ」

「おっ、おい！？ アイツの鼻血の量すげえぞ！？」観客の1人

がフジサキの滝のように流れる鼻血を見て叫んだ。すでに床下に浸水している。酒場のマスターは最悪だと思ったが、ついでに床代を請求しようと持ち直した。

「では次に俺だな。とりあえず俺が勝ったらお前の下着をもらう」
ブツダはマザクを見て言った。「やっぱりか！」フジサキが怒った。すでにマザクは自分のモノだと思っているらしい。

「ついでにお前もいただいちゃおう」

ブツダはマザクを指差した。マザクは「ふふん」と鼻で笑った。

「さらつとアイツえらい事言ったぞ！？ 虫も殺さないような顔してるくせに！？ 狙ってるのは下着だけじゃなかったぞ！」観客は驚いていた。

「なっ！？ 何やらしい事言ってるの！ 下着はあげるけどマザク様はよこして！」

フジサキは自分の欲望に忠実だ。同時に鼻血も飛び散った。

「じゃあお前が勝ったら下着はくれ」

「やるか！ 私のものは私のものなのよ！」

「ジャインかお前は？」

まあこうなることは予想がついていたので、ブツダは文句1つ言わなかった。

「これで我が勝てば結婚してくれるのだな？」

雲鏡はどことなく慎重に確認している。

「ああいいよ」

「本当だろうな？ 嘘ではあるまいな？ 24時間我はタイツなのだぞ？」

「本当さ。お前の妻になってやるよ」

雲鏡はマザクの挑発的な目にゴクリと唾を飲み込んだ。体が微妙に震えている。

「よかるう。貴様を屈服させ、我が物としてやろう！ ちなみに我が物となったからにはタイツは着なくていい」

「あいつもう結婚した後の事考えてるよ！？」観客はどよめいた。

「ふんっ！ いやらしい男ね。どうせ今エッチな事想像してるんでしょ？」

フジサキがさっそく雲鏡を挑発してきた。雲鏡は「ふう……」とため息をつく、紳士の目でフジサキを見つめた。穢れのない目だ。フジサキは「うつ……」と声に詰まった。

「私はこう見えても重要な任務に携わる身。そんな事を考えているわけがないだろう？ もう下品な事を言うのはやめたまえ」

「おやつ？ 机がガタガタ震えておるな？」

「お互い力を出し切ろうではないか。1人の女を手に入れるために、全力を尽くすのだ」

「雲鏡殿の所で妙にガタガタ揺れているのだが？ そこに震源地があるのではないか？」

ブツダの事を完全に無視し、雲鏡は足を組んだ。そうすると机がガタガタと揺れなくなった。「足で抑えたのか？」ブツダは呟いた。

「ふふ、馬鹿な男。私はあなたの弱点を知ってるのよ？」

「何？」

雲鏡の眉が狭まる。フジサキは不気味に笑っている。

「私の弱点だと？」

「そうよ。ズバリ！ あなたの弱点は犬よ！」

「……………」

「それ『おば』と勘違いしておらんか？」ブツダが突っ込んだ。「まったく、つまらん女だ。貴様などもはや雑魚中の雑魚。相手にもならんわ」

「なっ、なんですって！ 全身タイツのあんたに言われるとなんだかすごく腹立つわ！」

「貴様など我が力を持ってして、その体を破壊してやろう」

「……………」

フジサキの顔がカァーと赤くなっていく。

「ちょ、誰か！ この変態私を襲う気ですけど！ 今セクハラ発言が出たんですけど！ 満月のない夜に私を拉致していく気なんですけど！ 北の国に連れて行く気なんですけど！！」

「なっ！？」

「フジサキ大ピンチ！ あの白いアザラシ私に乗りかかって突っ込む気よ！ あんなミサイルみたいな物突っ込んで私を破壊しつくつもりよ！ 粉々にされちゃう！ 誰か！ 誰か猟師呼んで！ 散弾銃で撃ち殺して！！ 保健所に連絡して！！」

「誰がそんな事するものか！ その発言やめんか！！」

「まあ、そんな全身タイツ男に言われたら勘違いするのも無理ないな」ブツダは冷静に結論を出した。

「それなら俺も参加させてもらおうか」

アレクがマザクの前の席に座った。リデルが「えっ！？」と叫んだ。アレクがマザクの戯言に参加するとは予想外だったらしい。

「へえ。まさかあんたがこんな事に参加するなんてね」

マザクはニヤリと笑った。

「これが最後になるかもしれないから。お前に付き合つてやるさ」

「ふふっ、食えない男だねえ。で、あんたの望みはなんだい？」

アレクは真っ直ぐマザクを見据えた。口元が微かだが緩んでいる。

「俺が勝つたら……お前を貰う」

「なっ！？」

「なんですって！？」

案の定、雲鏡とフジサキが叫んだ。

「貴様もマザク殿に結婚の申し込みをするとは！ ハンター風情が

！ この帝軍に楯突く気が！」

「そうよ！ てゆうか、いきなり出てきてあなた誰なのよ！？ 私のマザク様に何をする気なの？」

「お前達が言うか？」 ブッダがいつもの通り突っ込んだ。

「……………」

リデルは腕を組み、アレクとマザクの様子を見守っている。

「おっ、おい。アレク」

スタットも2人の雰囲気を感じ取ったのかソワソワしている。

「いいだろう。私に勝てたら私はお前のものだ。好きにしていよ」

「好きにしているの!?」とやっぱり雲鏡とフジサキが反応した。ブッダはめんどくさくなったので突っ込まなかった。

「だけど！ 私に負けたらきっぱり諦めてもらうよ！ いいね！」

マザクはビシッとアレクを指差した。アレクは少し笑うと席に背をおいた。

「お前等なんかあったのかよ？」

スタットがマザクに囁いた。

「何にもないよ。あいつの事だ。これが最後なんで盛り上げようとしてるだけさ」

マザクはまったく気にしていなかった。

「それでは始めようか、親父！ 酒！」

酒場の店長がありったけの酒をマザク達の前へと置いた。ちなみに酒場のマスターはマザク達からはともかく、帝軍である雲鏡からは金が取れそうなので、マザク達を応援していた。

酒飲み競争一杯目。

「がんばれっ！ スタット！ 2人には絶対勝って！」

勝気なリデルがスタットを応援している。

（リデルが俺を応援している!? これは、いけるかもしれん!）スタットのやる気が上がった。

一杯目は全員なんなく飲み干した。

酒飲み競争五杯目。

「ぐはっ!？」

スタットが机に倒れた。もう限界のようだ。強面の上に白目をむいているので一層不気味な表情となった。

「なにしてるのっ!？ スタット! 起きて!」

リデルがスタットをガツガツ揺らした。観客からも「がんばれ! あんちゃん!」という応援があがった。しかしリデルに揺らされながらもスタットは白い泡をふきはじめた。

「競争が始まる前に……酒を……飲みすぎた……すま……ね」

それが最後の言葉だった。リデルがスタットの名を呼ぶ中、スタットは新たなる新世界へと旅立った。

残るは5人。ブツダとフジサキとマザクとアレクと雲鏡のみとなった。

「ふん、情けない男。1人脱落ね。ブツダ。このまま一気にあの『おば』を潰すわよ!」

「親父。ミルクくれ」

「諦めてる!？ もう諦めてるの!？」

ブツダは酒ではなくミルクを頼んでいた。もう無理だと判断したようだ。

「仕方がない。マザクの方は諦めよう。お前が酔いつぶれ、抵抗できなくなった所をいたたくとしよう」

「襲う気!？ 私を襲う気なのね!？」

「いやお前の体には何の……何の……何の興味もない。下着だけだ。負けなければよいのだ。簡単な事であろう?」

「そうね。絶対に勝ってみせる! ……てゆーか何で『何の』を3回言った?」

ある意味脅迫されているのだが気づいていないフジサキだった。

「ここから私の本気を見せてあげようじゃないの！」

フジサキは邪魔なのか両手の皮手袋を外した。両手の甲には『X I』と書かれてある。

(あれは……)

アレクがそれに気づいた。

ブツダ、スタット脱落。

酒飲み競争十杯目。

「ぶごっ！」

「うえっ！」

雲鏡とフジサキが同時に倒れた。さすがにアルコールが効いてきたようだ。2人はそれでもグラスに入った酒を飲もうとするが、手が震えて握めなくなっている。ちなみに皆が飲んでいる酒は相当アルコール度数のきついやつである。

「ぐっ、ここまでなの……ここで終わりなの……フジサキ。ここで少年漫画なら新たな力に目覚めたり、新キャラが登場して助けてくれたり、潜在意識の中にいる人とかが助けてくれるのに……」

フジサキの顔は赤く、もう限界が近づいてきていた。手がプルプル震えている。

「もう諦めればよかるう？ こっちにこいよ。カマ〜ン」

ブツダはオレンジジュースを飲んでいた。フジサキはキツとブツダを睨んだ。

「敗者の弁なんて聞かないわ！ もう少しがんばればマザク様は私のもののなのよ！ 『おば』だってあの通り限界が近づいている。あの突然出てきた男だって……」

アレクを見たフジサキは絶句した。アレクは余裕で酒をグビグビ飲んでいた。もう15杯は飲んでいる。

「親父、酒だ」

アレクはおかわりを注文した。リデルはアレクがこんなにお酒を

飲めることを初めて知って目を丸くした。

「そつ、そんな。あんな何の特徴もないキャラにこの私が負けるなんて。例えるなら恋愛ゲームで格好つけてる割には、美少女を主人公に取られちゃってるサブキャラ的な存在なくせに……。このままじゃマザク様を手に入れることなんて……」

またフジサキは絶句した。マザクもアレクと同じ15杯目をグビグビ一気飲みしている。「あの2人の肝臓どうなってんだ！」観客は騒いだ。

「ふう、やるじゃないかアレク。あんたがそんなに酒が強かったとは思わなかったよ」

マザクは赤い顔してアレクを褒めた。アレクと飲みあつたのはこれが初めてなので、嬉しそうだ。アレクは少しクールに笑うとグラスを机に置いた。

「お褒めいただいて光栄だね女王様。お前もやはり強いな」

すでにアレクとマザクの2人対決になっている。フジサキが入る隙がなくなってしまうているのだ。フジサキの意欲が凄まじい勢いで減退していった。

「現実がわかつたろう？ もう止めておけ」

ブツダがフジサキの肩に手を置いた。

「ふっ……ふっ……」

「ふ？ お味噌汁によく入っているアレか？」

「ふえ〜ん！！ やだやだやだ〜！！ 勝ちたい〜！！ 絶対勝ちたい〜！！ お姉様に甘えたいし、叱ってもらいたいし、剥きたい（？）のお〜！！」

フジサキが悔しいのかマジ泣きした。ブツダは普通に引いた。酔ってるので余計である。

「いい年して駄々こねるんじゃない。帰るぞ」

「やだ〜！！ せめてあの人！！ あの女の人連れて帰る〜」

フジサキはリデルを指差した。リデルは「えっ!? 私!?」と驚いていた。すでにフジサキチェックを受けていたようだ。ちゃっかりと狙っていた。

「勝気で癒し系美人なんて滅多にいないのよ! ここで手に入れないとミユウツーぐらいゲットできないわ! はぐれメタル級なのよ!」

「そんな時代古しな事を言うんじゃない。行くぞ」

「やだ〜!」

フジサキが子供のようにつまづきをこね始めると、マザクがトントと酒を机に置いた。

「ブツダの言うとおりだよフジサキ。もう止めときな」

「でも……だって……」

「ここで最後のお別れじゃないだろ? 私はお前の事気に入ったよ。もしお前が体を壊したらもう会えないじゃないか。だからここは止めときな」

「ひつく、ひつく」

フジサキはマザクの忠告に素直に従うようだ。抵抗を止めた。

「手間のかかる女でかたじけない。マザク殿。もしまた会える事があったのなら、また付き合ってもらえるか?」

「いいよ」

「許容の広い女だ。俺もまたあなたと出会えることを心待ちにすることにする」

ブツダはフジサキを抱っこすると酒場の出口へと向かった。体を持ち上げようとすると思われるし、オンブしようとすると思車してくるので、抱っこの方が手っ取り早いらしい。

「ふえ〜ん! 悔しい〜! こんなチャンス滅多にないのに〜!」

ギリギリとフジサキの抱きしめる力がブツダの体に食い込んだ。ブツダは眉を寄せ、「アダダダダ……」と呟いた。それは誰がどう

見てもコアラの親子に見えた。

「じゃ、俺達は帰るからな。……ちょ、強く締めすぎ。やめんかこの酔っ払い」

ブツダとフジサキは酒場から去っていった。皆呆然とその様子を眺めていた。遠くからフジサキの泣き声が木霊していた。

「あつ、あの人達酒代払ってない」

リデルはようやく2人が逃げ出した事に気づいた。

「ぐっ、おのれ……」

残された雲鏡は悔しそうに呟いた。

「もう止めておいたらどうだ？ どのみちマザクには勝てないだろ」アレクが雲鏡に助言した。雲鏡はそれが気に障ったのか、怒りで血管が額に浮かび上がった。

「小僧、我を舐めるなよ……」

「フツ、おっさん。体が震えているぞ。この勝負降りた方が妥当だと思うがな」

「くっ！」

図星だ。もう雲鏡は限界だった。アルコールを体が受け付けないのだ。それに比べてアレクとマザクはまだグビグビ酒を飲んでいる。勝敗は明らかだった。

「おっ、おのれ……。やはり正攻法など工作員の我には合わなかったのだ」

フラリと雲鏡は立ち上がった。

「おっ？ 何かやる気かい？」

「どんな手を使ってでもお前を手に入れてやる！ こうなればやはり力づくだ！」

雲鏡は手にマザクの髪の毛を一本掴んでいた。それはマザクの髪から自然と抜け落ちたものだ。

「我が力を見せてくれる！」

雲鏡は赤眼化した。右半身に赤い血筋、『神の紋様』が表れる。右目下にも文字が浮かび上がってきた。文字の名は『ベト』。一般的な赤眼化可能者に浮かび上がる『神文字』である。黒い瞳が赤く変色する。これで赤眼化は完了した。

赤眼化とは、別名『高度魔術師』と呼ばれている。この目を持つ者は『十三神』の力が使え、強力な魔法を使用することが可能となるのだ。身体能力も通常の倍以上になる。そのかわり赤眼化できる者は数が少なく、滅多にいない。それゆえに軍は貴重人材として積極的採用をしている。

赤い瞳がマザクを睨む。周りを囲った観客達は「せつ、赤眼化したぞ！」とその身を引いた。

「やる気か？」

アレクは剣の柄を持った。マザクも異様な空気に少し体を構えた。

「クラウンの名において命ず！ 我の姿をこの者に完全に写せ！」

クラウンとは十三神の1人、模倣の神の名前だ。魔道書によれば、自由に他人の姿に化けることができたらしい。その本当の姿は神々同士ですら見たことがない謎の神である。

雲鏡は赤眼化した者の特権である魔法、一桁詠唱を唱えた。一桁詠唱とは『神の名＋イメージする赤の言霊』により発動される。長い詠唱を必要とせず、魔法陣や魔道具もいらないので緊急の戦いに重宝されている。突然襲ってくる魔物には特に有効である。

雲鏡の体が魔法の光によって包まれていく。その術式に見惚れた観客はアングリと口を開けたままだ。それは30秒ほどで終わり、術が解け、光が急速に消失していった。

「！？」

雲鏡の姿はマザクへと変化していた。雲鏡は薄く笑った。

「これが我が力だ。相手の姿を完全コピーする。髪の毛から足の爪

まで全細胞、内臓もすべてだ」

マザクと化した雲鏡は余裕の笑みを浮かべた。その笑みもマザクそっくりだった。胸や腰周り、服装までマザクそのものだ。

「へえ」

マザクは少し感心していた。ここまでの術者を見た事がなかったからだ。

（さすが死帝と言った所か。クラウンの術は相当高度な術。声までコピーできるとは）

アレクは一目で雲鏡の実力を悟った。それは雲鏡の見方が変わった瞬間だった。観客達も「おおっ！！　　すげえっ！！　　さすが帝軍だ！！」と喝采した。

「へーそれで？　私に化けてどうするんだい？」

「フフッ、お前は酒が強い。ということはお前に化ければ我も酒が強くなる。それにお前はもう我と出会う前に酒を何杯か飲んでいる。ということはお前の限界は我の限界と同じだから、コチラが有利だということだ」

「そうかい。そりゃ単純だが面白い」

マザクは焦ることなく余裕だ。「すげえ！　さすがあのマザクだ！」観客達も叫んだ。その物怖じしない態度が気に入ったようだ。

「気をつけるマザク。ここまでの術者は帝軍の中でもかなり上位クラスだ。名前は聞いた事なかったが、能力から推測して暗部活動を専門とするのかもしれない」

「大丈夫だよアレク。この方が面白いじゃないか」

マザクにはアレクの注意も寝耳に水だった。アレクは少し笑った。「本当にお前が羨ましいよ。安心しろ。お前が負けても俺が勝つ」

「おっ、良い事言うじゃないか。でもいらないよ。そんなもの」

2人の会話をリデルは黙って聞いていた。

（それにしてもおかしい。この男といいさっきの2人といい偶然にも強者がここに集まりすぎている。コイツは帝軍、さっきの2人は

手の甲の数字から判断して賢帝のロストナンバーだ。まさか……）アレクの顔が曇った。

「ククツ、さあ始めようではないか。私の勝利はすでに確定しているがな。マザク、今日の夜はたつぷり私の相手をしてもらう。足腰立たぬようにしてやるわ」

「なんかすげえ卑猥だ！」観客達が叫んだ。全身タイツの雲鏡の台詞はすべてエロに聞こえてしまっていた。

フジサキ脱落。

1 - 6 雲鏡の告白

酒飲み競争??杯目。

「ぐべらっ!?!」

マザクが倒れた。いや、正確にはマザクに化けた雲鏡が倒れた。

「なっ……なじえだあ」

机にひれ伏した雲鏡は白目を剥いている。術が解け、マザクから元の全身タイツへと戻っていった。体が動けず、リタイアのようだ。
「まったく、大した女だ」

アレクはもう酒に手をつけていなかった。さすがに限界を感じたのだろう。何よりももうマザクに勝てる気がしなかったのだ。

「あのくそれじゃお開きということだ」

酒場のマスターがアレクに声をかけた。アレクは頷いた。これにより、まだ意識を保ち、酒を未だにグビグビ飲んでいるマザクの勝利が確定した。

第一回 酒飲み大会 優勝 マザク

「オオオオオッ!!」

観客達は拍手した。その見事にまでの飲みっぷりに涙する者までいた。「かつこいいぞ! さすがマザクだ!!」誰かが叫んだ。

「ふえっ? まだまだ終わってないじゃないか。親父、酒!」

「まだ飲むのかよ!」

マザクは観客に注意されてもグラスを掲げて酒を求めた。それを止めたのはアレクだった。アレクはマザクからグラスを取りあげた。
「何すんだよ！」

「もう終わりだ。お前の勝ちだ。これ以上はやめておけ」

アレクはそう言つと、机に寝そべっているスタットに声をかけた。
「立てるか？」

「うゝん、終わったか？」

「ああ、予想通りマザクの勝ちだ」

「ちっ、あゝ頭いてえ」

スタットはだいぶ回復したのか自分で立ち上がった。

「リデル。スタットを見てやってくれ。俺はマザクを連れて行く」

「……わかった」

リデルは苦い顔でスタットの元へ向かった。

「まだ終わってないじゃないか！ 酒！」

マザクは完全に酔っており、全身から酒の臭いを漂わせていた。

アレクはため息をついた。

「もう終わりだ。さすがのお前もこれ以上飲めば明日の仕事に支障をきたす。行くぞ」

アレクは無言を言わずマザクの体を持ち上げた。マザクは特別暴れることなくアレクに成すがままになっている。その姿に観客の1人が「いいぞ！ そのまま初夜を迎えちまえ！」と野次を飛ばした。口笛を「ヒュゝヒュゝ」と吹く者もいた。

「ぐっ、待て……」

雲鏡は悔しそうに顔を歪めてマザク達を呼び止めた。体は机にひれ伏したままだ。マザクはスタットに抱えられたまま雲鏡の方へ振り向いた。

「我ら一族はこの高度な術を発動させるためにこのタイツを着ている……それゆえ気味悪がられて嫁がでkindのだ……」

「趣味じゃなかったのか！？」観客達は驚いた。完全に変態だと思われていた。

「婚約者は3人いた。1人は事故で死んだ。2人目は我とは違う男と逃げた。3人目は我と結婚するのを嫌がって泣いてしまったので無理だと判断した」

「そのタイツ脱げばいいんじゃないか？」

「それが簡単にできれば苦労しない。このタイツとは一生を共にしていかなければならぬのだ。それが我ら一族の誇りなのだ」

「難儀だねえ」

「我ももう33だ。うるさい叔母から早く結婚しろとせつつかれている。最初は無視していたが、さすがに最近はそうはいかなくなつた」

雲鏡は机に伏せたまま真剣な顔で言った。誰もが静かに雲鏡の話を聞いていた。

「お前だけなのだ」

声が低い。

雲鏡はマザクを見上げて言った。

「お前だけが我を怖がらず、結婚してもらえるチャンスを与えてくれた。それゆえ本気でお前を欲した。だが敗れた。約束は守ろう。我は……我はお前を諦めることとする」

雲鏡は泣いていた。

いわゆる敗北した後の男泣きというやつだ。

観客達も同情して誰も、何も言わなかった。

「諦めんなよ」

マザクは雲鏡に向かってニツと笑った。

「私はお前の事、嫌いじゃないよ。今度もまた何かで勝負しよう。それで勝てば私はお前と結婚してやるよ」

「ふんっ、気休めはやめてくれ」

「ばっか。私は本気だよ？」

「それならば次の勝負で勝てば私の妻となってくるのか？」

「勝てばな。お前と一緒にいるのも楽しそうだ。悪くない」

雲鏡の顔がパツと明るくなる。パチパチと観客達は拍手した。マザクは優しく微笑むと、アレクに言った。

「さっ、私を宿屋に連れていきな！」

「フツ、わかったよ。我儉な女王様だ」

アレクはマザクを抱えたまま酒場を出て行った。リデルとスタットもそれに続いた。残された雲鏡はマザクがいなくなるまでその後姿を見守っていた。

「さすがマザク殿。ますます我は惚れたぞ。次こそは必ずお前を手に入れてみせよう」

「あのくとりあえず酒代なのですが……」

「私のタイツに小切手が入っている。そこに金額を書け」

「はっ、はいはい！ 毎度ありがとうございます！」

酒場のマスターはさっそく嫌々雲鏡のタイツから小切手を取り出すと、金額を書き始めた。その金額を見た客の1人は「うっ……」

と声が詰まった。雲鏡は小切手の金額を見て、「ふん、その程度か」と吐き捨てた。

「雲鏡！ 雲鏡はいるか！」

酒場の扉が開き、眼鏡をかけた女が入ってきた。帝軍特注の鎧を着、腰には剣を吊している。一見男のような格好だが、声色は確実に女だ。

「おおっ、眼鏡ではないか」

眼鏡の女は雲鏡の仲間、ボタンだった。

「誰が眼鏡だ。こんな所で何してんのよ？ ……というか、どうして人間に化けていない？」

普段、雲鏡は平凡な人間に化けている。タイツ姿で町中を歩けば誰もが怪しむからだ。

「人を化け物呼ばわりするな！ たまにはこの格好で人前に出たくなるのだ」

ボタンは声を低くして、雲鏡に耳打ちした。

「まずいでしょ、それじゃ。暗部活動してるのに、目立ちすぎだ。それよりもここで何してる？ 嫁探してもしてたのか？」

「そうだ！」

「……冗談で言ったんだけどな。その格好で迫ったらどんな女だった逃げるだろ。人間になれ、人間に」

「ぬおおおお！」と雲鏡が机に寝そべったまま唸った。酒場の客はビクツとなった。

（まいったね……。最近結婚で悩んでいるとは聞いていたが、どんな理性が外れてきたな。人選間違ったか？）

ボタンの年齢は27歳だがとても雲鏡と結婚したいとは思わない。人間的な魅力はあるものの、1日中タイツ姿の旦那を見るのはさすがに精神的にきつい。この仕事を頼んだのも昔からの付き合いでやりやすいと思ったからだ。清廉潔白だった雲鏡が、ここまでおかしくなっていたとは予想外だった。

「とにかく出るぞ。明日は仕事の説明会があるんだから」

「わかった、その前に」

プルプルと雲鏡の手が震える。

「手を、手を貸してくれ」

「お前な……」

ボタンはしょうがないとばかりに雲鏡の手を取った。雲鏡は「すまぬ」と立ち上がる。そのまま2人は静かに酒場を出て行った。

「酒臭いな。悪いが近寄るのは止めてくれない？ あと化け物から

人間になつてくれる？」

「失礼な女だ。我は紳士……ウツ！」

「おいおい大丈夫か？ それにしても珍しいな。お前がこんなに酒を飲むとは」

「ああ、いい女との酒は最高だ」

「へえ、まあ振られたんだろ？」

「
言うな」

雲鏡の目から涙がチヨチヨ切れた。

「ほっ、本気だったのね」

酒場編：エピソード

マザク達が酒場を出ると、街は夜の街へと変わっていた。夜風がマザク達に吹きつけるが、冷たいどころか暖かい。人の叫び声や笑い声が所々から聞こえてくる。酒のつまみの香ばしい匂いもしてくる。

「ふー、気持ちいいね夜風が」

マザクはアレクに抱えられたまま息を吸った。

「そうだな」

アレクは適当に相槌をうった。

「これがお前達と飲む最後だなんて本当に悲しいよ」

「……そうだな」

アレクの顔が曇る。マザクはその頬をパンツと軽く叩いた。

「何しけた顔してんだい。あんたはそんな顔しない方がいい男だよ」

「それは嬉しいね」

「ほんとだよ？ 信じてないね」

マザクは目を閉じた。さすがに疲れたようだ。

「ほんと……いい夜風だ」

「マザク。さつき飲み合った連中は恐らく明日の仕事関係で来ているはずだ。明日は早めに出るぞ。先をこされるのは……」

「スー、スー……」

「寝てるのか？ 本当にお前が……」

アレクは口を閉じた。マザクの寝顔に少し魅かれたからかもしれない。これ以上マザクの睡眠の邪魔はしたくないという感情が動いたのだ。

「……………」

リデルはその様子を何も言わずに見守っていた。

《次の日。宿屋》

「ああ、そうだったそうだった……寝ちまって忘れてた」
寝癖を直しながらマザクはブツブツ独り言を言った。

「次から酒はやめてもらおう」

頭の中で白山羊のホーリーランスが文句を言う。

「いいじゃないか。たまには」

「たまには？　いつも飲んでいないか。昨日の酒は解毒するの処理が追いつかなかった」

明らかにホーリーランスは怒っていた。

「それに昨日のタイツ男は手強かった。お前はもともと酒が強い。その能力を完全コピーした上に、自分の能力を上乗せしてきたのだ。もう少しあの男が倒れるのが遅かったら我らの負けだった」

マザクが頭を掻く、それでもホーリーランスの愚痴は止まらない。

「お前に倒れられては私が困る。お前の命と私は共にあることを忘れるな。お前の身体能力や老化を抑えているのも私のおかげだ。男に好かれやすいのも私が栄養源をうまく吸収し、肌やホルモンを調整しているのだ。確かにお前は望んでいないかもしれない。だが、私と契約した時点で……」

「あゝ、悪かった。ほんと私が馬鹿だった。謝るよ」
マザクは鏡の前で謝った。

「次は止める。絶対止める。だからガンガン頭が響く中で愚痴はやめてくれ」

「まあいい。それよりも昨日の人間達は少し気になる」
ホーリーランスは一通り愚痴を言っていると、話を切り替えた。

「昨日の？」

「見た目はああただったが、放っているオーラは常人とは違うものを持っていた。そんな人間そういないはずだ。それが偶然にもお前の前に現れた」

「確か……ブツダ、フジサキ、雲鏡の3人の事かい？」

「そうだ。今いるチームのリーダーに話してみるといい。何か気づいているはずだ」

「アレクが？　なんで？」

「私は疲れたので休む」

スウ　と頭の中から声が静かになった。相変わらず一方的だ。マザクはタオルで顔を拭きながら昨日飲んだ連中の事を考えてみた。

「私にとっては楽しい奴等にしか見えなかったけどね」

服に着替え、荷物を手に取ると、机の上に置いてあったロットの手紙と昔撮影した仲間との写真を手に取った。

「待つてろよ。この仕事が終わったら会いに行つてやるからね」

写真のロットに言うつと、また笑顔のマテリアが目がいった。マザクは少し笑うと大事そうにポケットに写真と手紙を入れた。

2階の部屋を出て、階段を降りると今の仲間が待つていた。

リーダーのアレク、戦士のスタット、魔術師のリデルの3人だ。

3人はマザクに気づいた。リデルが大きく手を振る。

「待たせたね」

マザクは白い歯を見せて笑った。

「お前平気なのかよ……」

まだ頭がガンガン響くのかスタットが頭を押さえながら言った。
「情けないねえ」。あれぐらいで」

「あれぐらいってお前……もう何杯飲んだか……あたたたた」

「もう！ 2人とも飲みすぎよ！」

リデルが腰に手をやりプンス力怒った。

「それにアレクも！」

「すまないな。つい調子に乗った」

アレクは悪びれた顔もせず、いつものように笑った。

「さて、あんた達とはこの仕事で最後だね」

「ああ」

リデルがその言葉に口をつぐんでしまったので、代わりにアレクが答えた。

スタットが懐かしそうに腕を組む。

「もうお前と飲めないなんて寂しくなるよ」

「何言ってるんだい。この仕事が終わったら当然飲みに行くんだよ」

「マジで！？ かゝ最悪だ」

「だからお前達……」

マザクが一步3人の前に出た。朝日がマザクの顔を照らした。それは確かに光輝いていた。

「絶対に死ぬんじゃないよ」

「……そうだな」

スタットが鼻をこすった。

「あたりまえよ。この仕事は絶対に成功させるんだから」

リデルは明るく笑った。

「そうだな」

アレクが柱を背に言った。

「マザク」

アレクが柱から離れ、マザクの前に立った。背の高いマザクと同じ背なので、目線が平行線に合った。

「この仕事が終わったらお前に話したいことがある」

「うん？」

「だが今回の仕事は危険度が高い。もしかすると死ぬ可能性だってある。だからここでお前に……」

マザクがアレクの背中を叩いた。

アレクは驚いて目をパチクリさせた。

「終わってからでいいよ。仕事は緊張感を持ってしないとね。終わったら今度こそみんなで飲みに行こう！」

アレクはまた少し笑うと「わかった」と口を閉じた。

「さあ！ 行こうぜ！」

その土地は黄土色の泥沼だった。転々と沼地があり、浅いが人の足に絡みつく。崩れかけた木材は、十字架のような形を造り、人の墓のように見えた。空の方で風が悲鳴を上げている。獣の頭を模った彫刻が不気味に光る。その彫刻に描かれた建物が、空中を規則正しく移動していた。

「はあ……はあ……」

泥沼に足を捕られながら、1人の男がバシャバシャと駆け抜けていく。手には刃のこぼれた剣を持っていた。鎧はヒビが入り、頭から血を流している。左腕は何か鋭いもので切りつけられたのか動かせないようだ。

「はあ……くっ、くそっ」

疲れて男はその場にへばった。空を獣の彫刻が描かれた建物がユラリと流れるように浮遊している。建物の影が男に被さった。

「ひっ！」

男が悲鳴を上げた。何かの声が聞こえたからだ。動かない体は無

理矢理引きずって、近くの建物の傍に隠れた。腕から流れる鮮血が沼地を赤く染めていく。

「なんでだ……」

男は呟いた。頭から流れ出る血が目に入ろうが構わなかった。何よりもこの不条理が許せなかった。

「なんでこんなことになったんだ？　これからって時に……」

男は懷から写真を取り出した。そこには男と他にも3人の仲間が写っていた。

「ミノス、モート、クロノス……俺達がこんなに早く」

男は怒っていた。

自分達の不甲斐なさに。

「アイツらはいったい何なんだ？　何がどうなってる？　ここはいったい……」

怒りの後の後悔。

「エコーズやマルスオフなんて……いないじゃないか」

男はガクリと項垂れた。

「そうだ、おかしいぞ……そもそもなんでこんな所に住むエコーズを倒せだなんて依頼なんだ？　それになぜあの王は動かない？」

浮かび上がる疑問。

「アイツ等の顔、そうだ。絶対におかしい。何かあるはずだ……」

『……………』

その声を聴いた瞬間、男の思考能力は恐怖で停止した。

「ひっ!？」

男はキョロキョロと周りを見回した。だが、誰もいない。

『……………』

「どっ、どこだ!?　どこにいやがる!？」

男の耳には確かにソレが聞こえていた。必死で辺りを探すが、まったく影すら見つからない。生気を失った顔が、恐怖へと移り変わ

る。

『……………』

「こんな所で死んでたまるか！ 生き残って仲間の仇をとって……」
突然、男の首があらぬ方向へと曲がった。
それはあまりにも速すぎて、男は自分が即死したことにすら気づかなかった。

ソレは男の首を掴むとブチブチと頭をもぎ取った。

ソレは男の真上、建物の壁に這いつくばっていた。

「あゝれれ」

イモムシが「またか」といった顔をした。 刑務所に居た時と同じ兵士の格好をしている。

「アハ、また遊んでる」

ナメクジが太った体からジュルジュルと液体を垂れ流した。

「またどつかのハンターの首で遊んでやがる。ほんと劣化が激しくなったもんだ。そろそろ潮時じゃない？」

イモムシが隣で立っているオオムカデに意見を求めた。

「確かにこれが潮時じゃのう」

その建物の屋上には3人いた。S級犯罪者、イモムシ、ナメクジ、オオムカデの3人だ。彼等は屋上から下界の様子を眺めていた。

「あのハンターは有名人じゃ。あんな強者が来るということは、王が焦っている証拠じゃのう」

両腕のないオオムカデが右目で地上を見下ろした。

「つたく、これで何人目だよ。あの女を誘い込むのに最適な場所だと思っただのに。余計な邪魔が入るんじゃないの？」

兵士の格好をしたイモムシがめんどくさそうに肩を鳴らした。

「かもしれぬ。だが問題はないじやろう」

オオムカデは興味をなくし遠くを眺める。

「ほんと、子供って残酷」

泥沼で遊んでいるソレに向かって、イモムシは皮肉った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2573w/>

帝国物語外伝 ～赤髪のマザク～

2011年12月5日20時48分発行